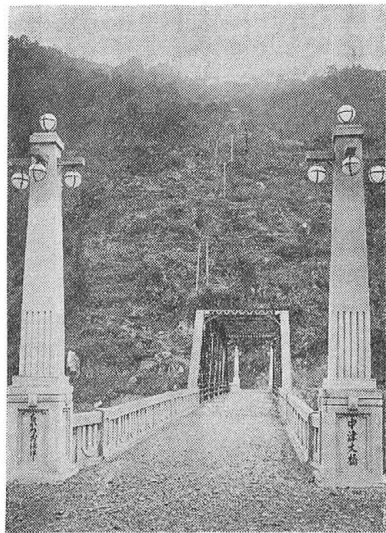


第四篇  
中  
津  
村



中津大橋（大正14.11架橋）

第一章 自然

第一節 面積・地勢……………五六九

第二節 気候……………五六九

第三節 生物……………五七〇

第二章 歴史

第一節 藩政以前……………五七〇

第二節 藩政時代……………五七三

第三節 明治以後……………五七五

第三章 産業・経済

第一節 産業……………五七七

第二節 財政規模の変遷……………五七九

第四章 教育

第一節 学校のおいたち……………五八二

第二節 各校の沿革……………五八五

第五章 交通・通信

第一節 交通……………五九〇

第二節 通信……………五九六

第六章 治安と消防

第一節 治安……………五九六

第二節 消防……………五九七

第七章 民俗

第一節 衣・食・住……………五九八

第二節 年中行事……………六〇一

第三節 子どもの遊び……………六〇四

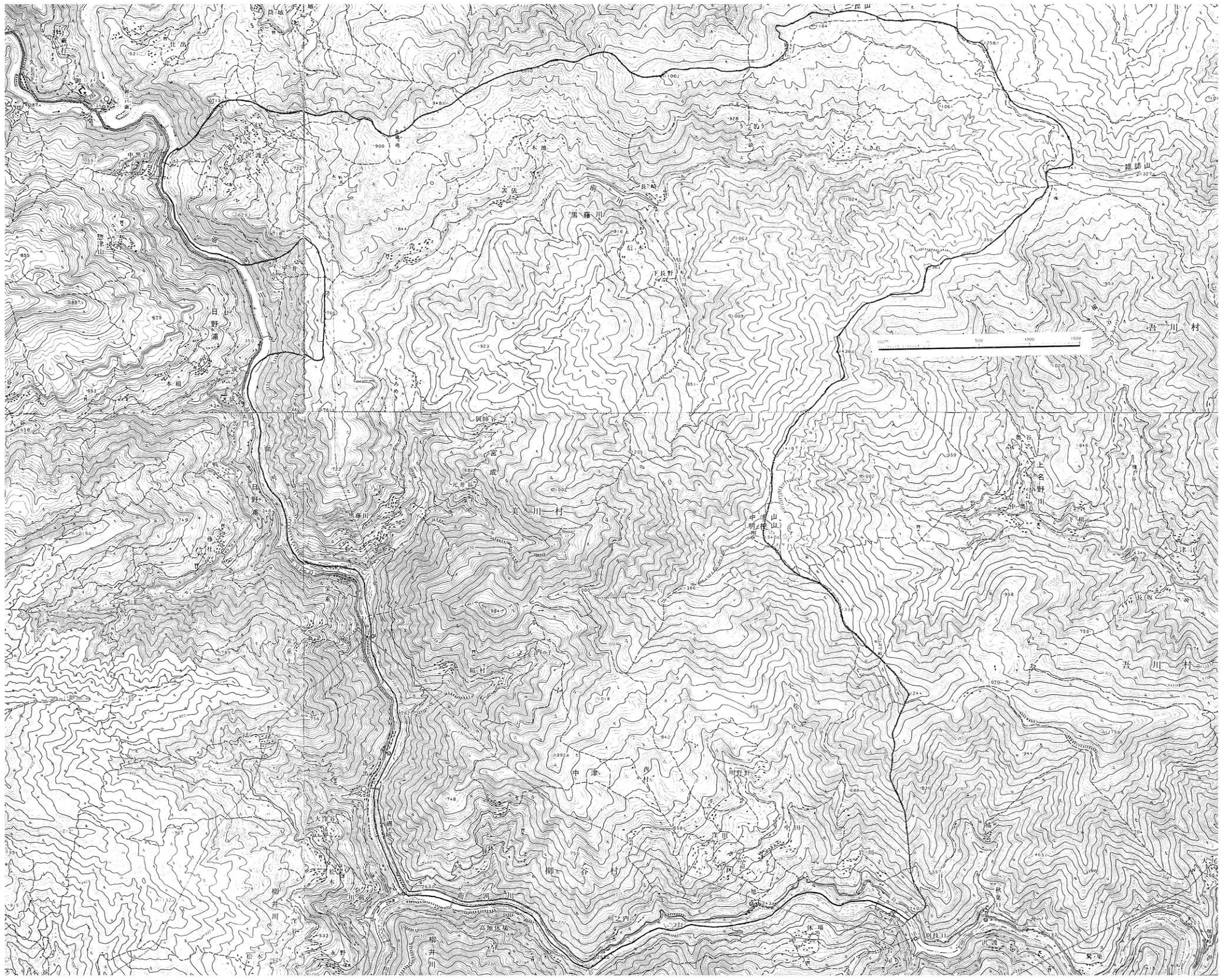
第八章 伝説と旧跡

第一節 伝説……………六〇五

第二節 旧跡……………六〇五

第九章 村につくした人々

第一節 歴代村長・助役・収入役・村議会議員……………六一四







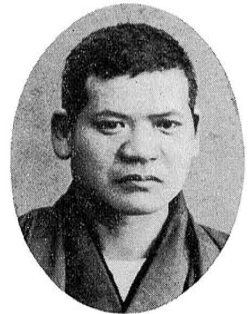
中津村歴代村長



11 代  
宅 宮 長三郎



8, 9, 10 代  
亀 井 要



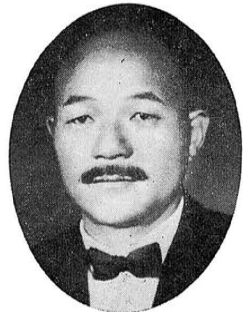
4, 5, 6, 7 代  
古 田 利 作



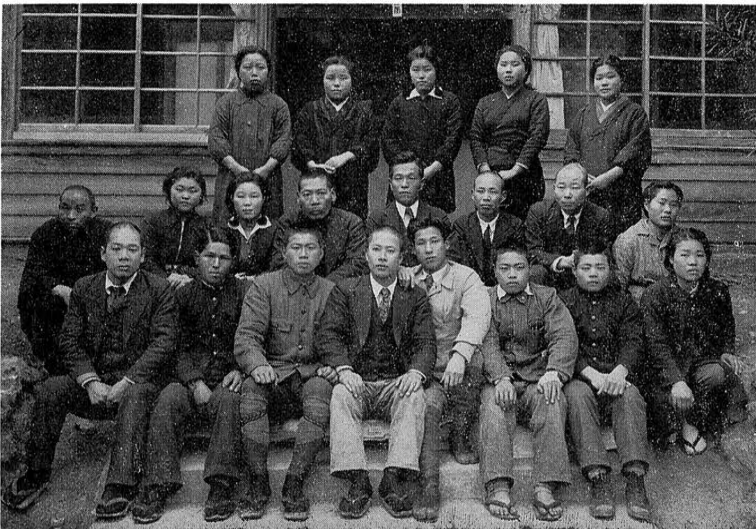
19, 20 代  
政 木 茂十郎



18 代  
伊 藤 幾太郎



12, 13, 14, 15, 16, 17 代  
久 保 雅 晴



中津村役場職員（昭和19年3月）



第一章 自 然

第一節 面積・地勢

中津村は上浮穴郡の東南に位置し、北部は仕七川村、西部は仁淀川を隔てて弘形村・柳谷村、東部は高知県吾川郡に境している。

本村の総面積は四九〇八畝で、その内訳は、

宅地面積	一五畝
田面積	六七畝
畑面積	一八三畝
山林面積	四、二八〇畝
その他	四〇一畝

であり、村の東西六・五四キ、南北一二キである。(昭和二九年調査の役場資料をノートル法に換算)

本村は四国山地の中にあるため、中津明神(一五四〇<sup>ノ</sup>ノ)・雑誌山・源次郎山などの高峰が東方にそびえ、それが西南に傾斜して仁淀川の河岸におよんでいる。土地はほとんど

急斜面で集落はその間に点在し、産業・交通の発達に大きな妨げとなっている。地質は水成岩からなっている。仁淀川は本村の西南辺を形成して高知県へ流れ込むが、本村の河川はすべてその支流となっている。

おもな支流に前川がある。雑誌山を源として中津明神のふもとを流れ仁淀川に注ぐもので、長さ約九・五キある。水勢が激しく所々から溝をつくり黒藤川の水田を潤している。桂ヶ谷は西北部沢渡を流れる溪流である。法師ヶ谷は稲村、小松ヶ谷は中津明神の東南斜面の水を集め、久主の水田を潤している。沢渡の赤蔵カ池は周囲約一〇五キあって灌漑用水として重要である。多くの鮒を養っている。沢渡には新池・皿力成池などの小さな池もある。土地はだいたい肥沃で、みつまた・とうもろこし・米(反当七、八俵)などを産する。

第二節 気 候

地勢が複雑であるため、全村一様ではないが、久万地方に比べると温暖であるといえる。

気温 最高気温約三五度、最低気温約零下一〇度、年平

均気温約一五度、

結霜期 初日が一月二二日で、終日は四月二六日、

(昭和三〇年～三一年黒藤川中学校調)

結氷期 一月から三月下旬まで、

降雪の状況 降雪量は所により異なるが、しだいに減少

の傾向にある。久主地方に比べると沢渡地方の方が量も多

く、また残雪期間も長い。初日は一月一日、終日は二月二

一日、(昭和三〇年黒藤川中学校調)

降水量 年によってかなり月別降水量は異なるが、年間

二〇〇〇ミリ前後の降水量である。

風 夏季は南東の風、冬季は北西の風が多いが、地形の

影響が非常に大きいため風向・風力については平地のよう

な一定のデータが得られにくい。

天気 夏・秋両期には快晴が多いが、冬季には曇天が多

い。

### 第三節 生 物

植物 四国地方一般にみられる普通の植物である。みか

ん・夏橙・ぼしょう・柿・柿・千振・いちぢく・もうそう

竹・いわたけ・章麻など。二篔附近に矢竹がある。これは

笹の種類で節と節との間が普通の竹より長く、また節が小

さいので矢にするのに適している。茎から二本の芽が出る

ので、双生矢竹といわれる。

動物 特に変ったものは見られない。最近植林が進むに

したがい営林署などが、ねずみの害を防ぐためハクビシン

を山に放っている。仁淀川には、ウナギ・イダ・ハヤな

ど、また前川ではマスの一種であるアメノウオ・ウナギ・

モツゴなどがある。ダムが建設されるまではアユなども仁

淀川をさかのぼってきたが、現在ではアユの放流が毎年な

され、解禁と同時に人々を楽しませている。また、アメノ

ウオ・マスの養殖もさかに行なわれるようになってい

る。

## 第二章 歴 史

### 第一節 藩 政 以 前

藩政以前の中津村については確実な史料が見当たらない。

第一章久万山の歴史に記した以外に言えぬのであるが、こ

の村には窪田に大寂寺があり、二箇に矢竹の群生があり、その上に赤蔵ヶ池があつて源三位頼政にかかわる伝説があるので、まずこの事に触れておく。

この話を載せた最初の本は「予陽郡郷俚諺集」で松山藩家老奥平貞虎が寛永七年（一七一〇）に領内村々の伝説をまとめたものである。この中に荏原村の新居張屋敷について、

此屋敷は土佐領光源三位頼政、知行居住とも言う、近衛院仁平三年宮中に於て鶴つるを射、宮女を賜う、又当所にて七百二十町賜う、村数は田窪・津吉・上林・下林等なりという。

とあり、また久万山については

。遊カ池、二箇村の上にある、あぞふが池と言う。是は源三位頼政射たる鶴出でし池なり、不審の所に一手箇矢竹生ず。

。大釈庵、葛村いま久主村と書く、土佐左近将監位牌有り、一説に土岐大膳太夫位牌有りと申す。草庵も今は退転し、村老もいわれを知らず。

とある。二六〇年くらい昔に、このような言い伝えがあつ

たものと思われる。また年代不明であるが「予陽古跡俗談」というものに、

土岐頼政位牌 久主村大寂寺に有り、

土岐頼任位牌 上畑之川村定禪寺に有り、

右の来由、今詳かならず、両寺も古跡のよし言え共、

さらに委しき事もなし。

鴨住か池 縮川之内二ツ野に有り

あぞふが池、今はかたちばかりにて少々水溜り、草など生茂れり、昔此処に怪鳥有けるよし、其外様々に言

い伝る事あれども、たしかなる事なし。

一手矢箇竹 同村に有り

一手宛節揃ひて生立ゆへ所をも二ツ野と言うよし、今は稀にあり。

この話をやくわしくまとめたものに、宮脇通赫の「伊予温故録」（明治二十七年発行）がある。これは各郡の名所旧蹟を古老に聞いて記したものである。赤蔵ヶ池について原文のまゝ記しておく。

鴨住ヶ池

黒藤川村字二ツ野にあり或は鶴池といふ、又遊か池、



阿藏か池とも書す、此池今は形ばかりにて少し水溜り  
草生茂りたり、昔此処より怪鳥出し由、其の外さまざ  
まいひ伝ることもあれど、たしかならずと俚諺集に見  
ゆ、二ツ野は昔源三位頼政が母の隠居せし処なり、頼  
政の母は寺町加賀守宗綱の女なり、宗綱は伊予親王の  
子浮穴四郎為世の孫、京都にて任官し加賀守となる、  
母常に思ふやう、我源家の先は清和天皇の裔にして世  
々武將となり、其の威権並ぶものなし、然るに今や平  
氏我家の威権を奪ひ源家の一族は日に衰ふ、我が心中  
これを恨みて止む能はず、都に居て平氏の榮華を見聞  
かんこと忍ばれずとて、遂に家綱に依り当国に來り此  
地に移つて幽居し、ひそかに源氏の武運を神仏に祈り  
ける、此村に一手つつ揃ひたる竹ありて矢竹となすに  
宜しき故、世人伐り取りて矢を作れり、よつて地名を  
二ツ野といふ、頼政の母自らこの竹を伐り矢を作り京  
師に送り頼政に告げていふ、射術は武夫の専務たり、  
これを勉めよと、後ち母病んで危篤なる時に怪鳥來つ  
て此池の畔にすむ、其鳥は猿の頭、蛇の尾、虎の爪、  
鳴声は鶯(やま)に似たり、晨旦(あした)は來りすみ夜は飛び去る、時

に京都にも此鳥あり、(夜の十時)二更の後、天皇御寢室の上にて  
鳴く、天皇頼政を召してこれを射らしむ、仁平三年四(一一五三)  
月七日夜、母の送りたる矢を以て射たるに一発にして  
中る、あた其の夜母も又死せり、これより怪鳥も又此の池  
畔に來ることなしといふ、

大寂寺

久主村字久保田にあり、(一一八〇)治承四年四月源三位頼政創建  
す、頼政氏を土岐と稱す、此寺に土岐頼政の位牌あり  
といふ、

源三位頼政の怪鳥ぬえ退治の話は「平家物語」や「源平  
盛衰記」にも出ていて、読みやすく書かれているので有名  
になった。しかしこの頼政が伊予国に來たことは全くな  
い。いま「続群書類従」によつて土岐氏の系図を調べて見  
ると土岐頼政という人はある。治承三年(一一七九)に出家  
して頼円といった歌人でもある。この時代から少し下つて  
土岐六郎頼清という人があり、伊予国に六年いたといふ  
し、そのころ土岐光定という者もいて出家して興源寺に入  
つたが、この寺は荏原村にあると記してある。土岐氏は元

来美濃国の出であるが、伊予国と関係があったことは事実で、荏原の大宮八幡宮は土岐頼政が建立したと記した本もある。久万山の地は古来、「伊予国浮穴郡荏原之郷熊之庄野尻の里」と言われて来たところある（古今見聞録）から荏原にいた土岐氏は久万山まで支配地としていたかもしれない、土岐頼政が同時代の人だったので、有名な源三位頼政と混同されたものと思われる。

## 第二節 藩政時代

### 一、庄屋の系譜

#### 沢渡村

伊予史談会所蔵の「久万山手鑑」は元来大川村庄屋土居家所蔵のものの写しで、寛保前後の年代に記されたものと考えられる。内容について見ると享保一八年（一七三三）までが記され、畑野川村に関してだけ延享元年（一七四四）まで書きつがれている。享保一八年当時の本村庄屋は次郎右衛門とあり、日野浦村と中黒岩村と三村を兼ねており居村は日野浦村であったようである。いま庄屋廃止の明治五年

（一八七二）の庄屋名を「松山領里正鑑」で見ると船田清平とあって、同じく右三村を兼ねて居村は日野浦村とあるから、一四〇年前の庄屋次郎右衛門はその先祖であろう。

戦国時代に久万大除城主大野直昌の配下で東明神の船山城主であった船草出羽守の知行所は日野浦・沢渡・黒岩村下分であったので主家没落ののち、出羽守の三男新右衛門昌春は日野浦村に退居し、戸田民部少輔支配のとき、居村の庄屋役を命ぜられた。この船草はのち船田と苗字を改めたのであるから、沢渡村の庄屋はこの船田家で一貫したものと考えられる。

#### 黒藤川村

前記の「久万山手鑑」で見ると、この村の庄屋は重右衛門とある。大川村土居庄屋家の「諸覚日記」（文化三年）を見ると庄屋十右衛門である。文化三年は一八〇六年であるから、「久万山手鑑」よりは約七〇年後のものである。重右衛門も十右衛門も実は同じ通称であるから、この間に庄屋家の異動があったとは考えられない。この家柄をたしかめる記録は不足しているが、明治五年の「松山領里正

鑑」には当主梅木二三とあるから、重右衛門も恐らく梅木であろう。してみるとこれは久主村庄屋の一族と考えられる。

### 久主村

久主村初代庄屋は入野の天神森城主梅木但馬の子馬之助で、慶長八年（一六〇三）から慶安二年（一六四九）まで勤めている。東川村庄屋を任命され、七鳥村、仕出村を兼ねて寛永一六年（一六三九）まで勤めた与右衛門も久主村から来ておるので、東川村庄屋は最後まで与右衛門の子孫が相ついだ。「久万山手鑑」による享保一八年（一七三三）の頃の久主村庄屋は与次兵衛であり、明治五年の庄屋は梅木盛久とあるから、これもまた藩政時代を通じ、梅木庄屋であったと考えられる。

### 一、村高・戸口・年貢率

享保一八年（一七三三）の頃の数字を示したと考えられる「久万山手鑑」によって、各村々の実態を記しておく。

。沢渡村

石高九三石七斗八升二合（一一町八反）

田 一一石二斗（八反）

畑 八二石五斗八升二合（一一町）

家数五二軒

人数 二二一人（男一〇八人、女一二三人）

牛馬 一二疋（牛四疋、馬八疋）

年貢 享保一八年 四割一分

久万山は寛文七年（一六六七）から延宝元年（一六七三）までの七年間、元禄六年（一六九三）から享保一〇年（一七二五）までの三三年間は定免じよめんといって年貢は一定であった。この村は前期では四割三分、後期では四割五分であり、この四割五分は定免の終った翌年から享保一七年までも変っていない。このような本年貢の外、小物成といって薪・茶・竹・漆・麻苧・炭・菅藤などにも課税せられ、庄屋給米四俵、小走一人三俵などを負担させられている。

。縮川村

石高三〇石二斗八升九合（三四町二反二畝）

田 一石八斗（一反二畝）

畑 二二八石四斗八升九合（三四町一反）

家数一七六軒

人数七九〇人（男三七七人、女四〇八人）

出家一人、禪門二人、座頭二人）

馬 四二疋

年貢 享保一八年 六割四分

沢渡村で記したように前記七年の定免は六割八分、後期はこの村は元禄三年から三六年定免で七割二分、この率はなお享保一七年までつづいている。沢渡村から見て随分高率であるが、新田開発による反別の増加によるものであるうか、小物成も同様であり、庄屋給米一二俵、小走三人給米一〇俵四升五合、使番給米三俵などの負担があった。

。久 主 村

石高一四二石四斗四升（一八町四反三畝）

田 三三石八斗四升（二町一反三畝）

畑一〇八石六斗（一六町三反）

家数一二二軒

人数六七一人（男三二五人、女三四〇人）

出家一人 道心二人 禪門二人 座頭一人）

牛馬 六三疋（牛一九疋 馬四四疋）

年貢 享保一八年 六割六分

前期七年の定免六割五分、後期三三年の定免から享保一七年にかけて七割となっている。やはりこの高率は菰川村と同様に村高はもとのまゝにしておいで開発された新田分を見越しての年貢率であろう。したがってこの率だけで高率と見るわけにはいかない。この村の小物成も前の二村と同種のものにかけられており庄屋給米一二俵、小走二人給米三俵三斗が村人に課せられている。

### 第三節 明治以後

#### 一、行政区画の変遷

明治四年に廃藩置県が行われて、伊予国でもこれまでの八藩がそのまま八県となった。しかしこれでは県の広さも大小さまざままで新政府の統治には不適當であったので、明

治五年には重信川を境として、東を石鉄県とし西を神山県として伊予国を二県とした。そしてこれまでの村をまとめて大小区制というものを定めた。石鉄県下は一八大区二一七小区というように分けられたが、藩政時代の松山領久万山は一七大区と呼ばれそれを一七小区に分けている。久主村、黒藤川村を合せて第五小区と呼び、日野浦村、沢渡村を合せて第八小区と呼んだ。

明治七年に愛媛県が誕生すると久万山は七大区と呼ばれ、中を八小区に分け、沢渡村、黒藤川村、久主村を合せて第五小区と呼んだ。大区には区長、小区には戸長がおかれたが、これらには従来の庄屋が任ぜられる場合が多かった。それにしてもこれまでの支配区域とは、ずれが出来たので戸長と住民との結びつきは弱まった。そのため明治一年に大小区制は廃止されて、もとの村が復活し戸長役場は久主と黒藤川に置かれたが、一八年からは黒藤川の戸長役場一つにまとめられた。

明治二年四月に町村制が公布されて二三年までに新しい町村が出来た。こうして中津村は誕生したのである。戸長および初期の村長は次のようであった。

氏名	就任	退任	本籍
福本禎次郎	一、一、一六	一〇、九、三	温泉郡南八坂町士族
丸山 精一	一〇、九、三	三、六、五	上浮穴郡入野村平民
岡田 為政	三、六、六	一、五	上浮穴郡柳谷村士族
亀井 茲武	二、四、元	二、三、三	上浮穴郡中津村大字久主
林 利与	一、三、一七	—	松山市大字新町二丁目

## 二、戸 口

藩政時代の沢渡村・久主村・縮川村の戸数人口については「久万山手鑑」によって、享保一八年（一七三三）と推定されるものを前に記したが、その合計は戸数三五〇、人口一、六九二（男八二一、女八七一）であった。

これが明治五年（一八七二）大小区制の実施のとき戸数三七九、人口一、九七三となっている。一四〇年間にわずかに戸数にして八%増、人口にして一〇・七%増というのは江戸時代後半の人口の横ばい状態という全国的傾向を示すものであろう。明治三五年（一九〇二）となると戸数五三八、人口二、六五四となっている。明治五年に比べて、わずか三〇年で戸数四二%増、人口三五%増という躍進を示



中津村戸口の推移

	戸 数	人 口		
		総 数	男	女
明治 5 ころ	379	1,973	1,022	952
33	—	1,580	—	—
35	538	2,654	—	—
37	523	2,829	1,485	1,344
38	519	2,842	1,493	1,349
39	523	2,841	1,493	1,348
42	543	2,942	1,518	1,424
大正 2	554	3,101	1,599	1,502
9	584	2,865	1,454	1,411
14	533	2,875	1,460	1,415
昭和 5	555	3,072	1,533	1,539
10	560	3,088	1,548	1,540
15	590	3,228	1,588	1,640
22	700	3,886	1,890	1,996
25	—	3,972	1,977	1,995

している。もっともこの統計そのものの正確度というものも考慮に入れなければならないが、それにしても明治前半期の国運の伸長の一現象と見て誤りあるまい。明治末期の四二年（一九〇九）に戸数五四三、人口二、九四二となり人口はようやく三、〇〇〇台に達しようとしているが、これが四〇年後の昭和二五年（一九五〇）には戸数七〇〇、人口三、九七二で四、〇〇〇台に達しようとするに至った。こうして町村合併を迎えるのであるが、この間の推移を示す

戸口の表を上に掲げておく。

明治時代のものについては乏しい資料をあちこちから集めたもので、大正九年国勢調査以後のように年代が整然と並べられていないのが残念である。

### 第三章 産 業・経 済

#### 第一節 産 業

明治末期に編纂された「中津村郷土誌」を見ると業種別に産物と年産額が記されている。説明を加えつつ、当時の産業を眺めて見よう。

#### 一、農 業

その起原遠く詳かならず、現今に至りてもなお旧式にして學術の応用に乏し、三極の栽培・養蚕等の行わるるもその盛んなるに至りしは明治二五年頃よりとす、地味肥沃なれども高峻の地なれば主産物として三極・林業・養蚕など前途多望なるものあるべし、と前置きして、農家

戸数、耕地面積、作目別に産額が列挙してある。

戸数 四〇三戸

耕地 田 八一町三反八畝二六歩

畑 一、〇一四町三反二畝一六歩

この水田八一町歩余(約八一畝)の内訳は自作五八町歩余、小作二三町歩余であり、利用上からの内訳は二毛作田約一三町歩、一毛作田約六八町歩である。また畑一・〇一四町歩(約一、〇一四畝)は自作五九二町歩余、小作四二二町歩余となっている。米の産額一、一二五石、麦一、〇五七石と記される。この外、みつまた 一八万二、二五五貫、甘藷 三万七、二三七貫、楮 一万三、一二五貫、馬鈴薯 二万六、五二二貫、青芋 一万八、七二三貫、大根 二万五、七八七貫、果物では梅 一三石、桃 一、四三二貫、日本梨 九一二貫、柿 一、一七五貫、干柿 二、四〇九貫、蜜柑 二五〇貫、夏橙 五七貫、柚子 三八〇貫が記されている。米麦の外は作目に時代による変更が多かったにしても、この田畑反別はその後も、さして変化はなかったとみてよいであろう。

二、養 蚕

戸数 九戸

桑園 八町歩、掃立 一二枚、収繭 一三石

三、林 業

自然林 三、二二三町三反

人造林 四二五町(杉・松)

右の所有者別内訳は公有林三八六町五反、社寺林二反歩、民有林二、八八八町四反となっている。これら林産物としては、

丸角材 一五万二、四九〇才、挽材 二万八、七八四坪、下駄材 一七、竹 三六〇束、棕櫚皮 一万五、二五〇枚、杉皮 二三〇坪、竹皮 三四八貫、五倍子 二五町、木炭 五、五〇〇貫、椎茸 二五八斤がある。

四、漁 業

淡水漁業戸数一三五戸、その種類は釣漁、籠漁、雑漁で八〇五貫、金額一、一三〇円である。内訳は鮎 三三二〇

貫、鰻 一八〇貫、鮪 二〇〇貫、鯨 五〇貫、蟹 五五貫、

### 五、工 業

工業として著しきもの少く、古来沢渡より紙を産したる外、二篋より轆轤細工を出したることあり、沢渡の判紙は近年改良紙を製するに至りてその面目を改め、久主の瓦と共に工業品の第一を占む、

と記してある。二篋から轆轤細工を出したというのは木地師が入り込んで自然林の良材を使って盆、キジの類を古く生産していたのであらう。現に「木地」という地名を残している。沢渡の紙は郡内に聞こえており障子紙を近くの村々などへ売り捌いていた。

戸数 製紙 三戸、瓦業 一戸、

産額 紙 一万四、七九二束、瓦 一万三、二五二枚、

原料 紙は中津村、仕七川村方面、瓦は中津村久主

金額 紙 二、九五八円、瓦 三三〇円、

### 六、商 業

戸数 三七戸（但し専業のみ）

種別 酒造販売 一、雜貨 七、旅人宿 六、飲食店

一〇、材木商 三、茶商 四、質商 一、牛馬売

買 五、

取引 高知市および松山市方面

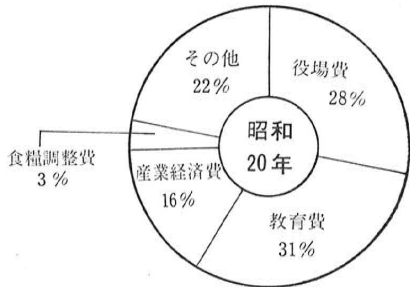
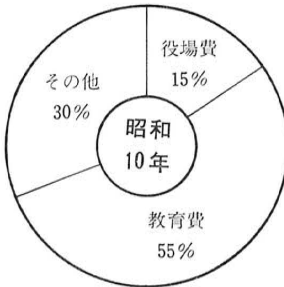
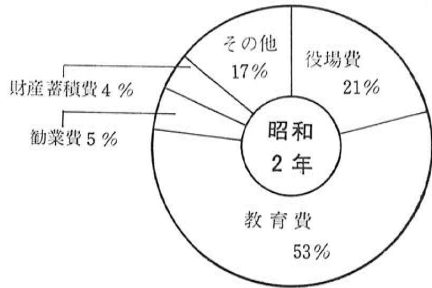
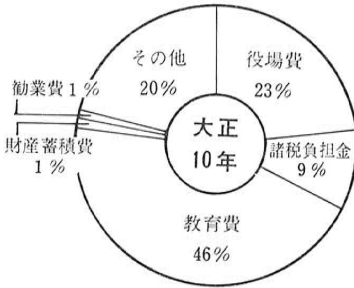
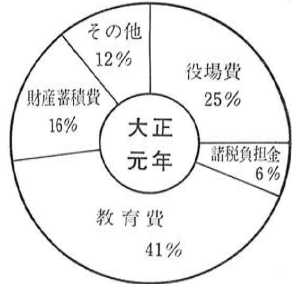
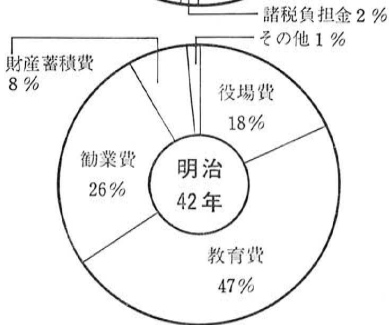
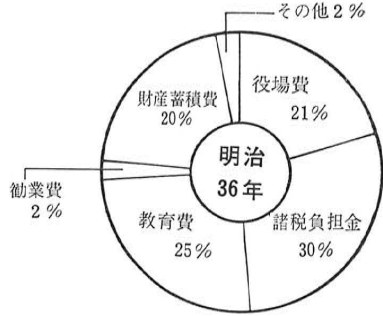
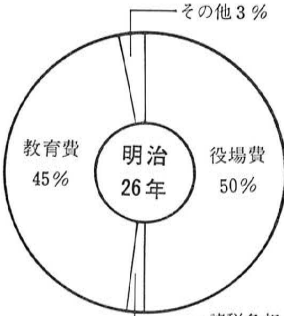
と記されている。これらの産業はその後も飛躍的な発展を遂げることなく、つづけられたと思われる。なお「上浮穴郡案内」小川薰水（明四三、九久万町船田右文堂発行）によれば、中津村の主要物産として、

二篋の製茶、沢渡の製紙、共に著しく、同所産出の製茶は品質好く香氣に富み、沢渡の製紙は古くして上位に居る、茶・紙の外地方物産は三樞・繭にして、養蚕はなお初期時代に属し、黒藤川筋これに適せり、とある。

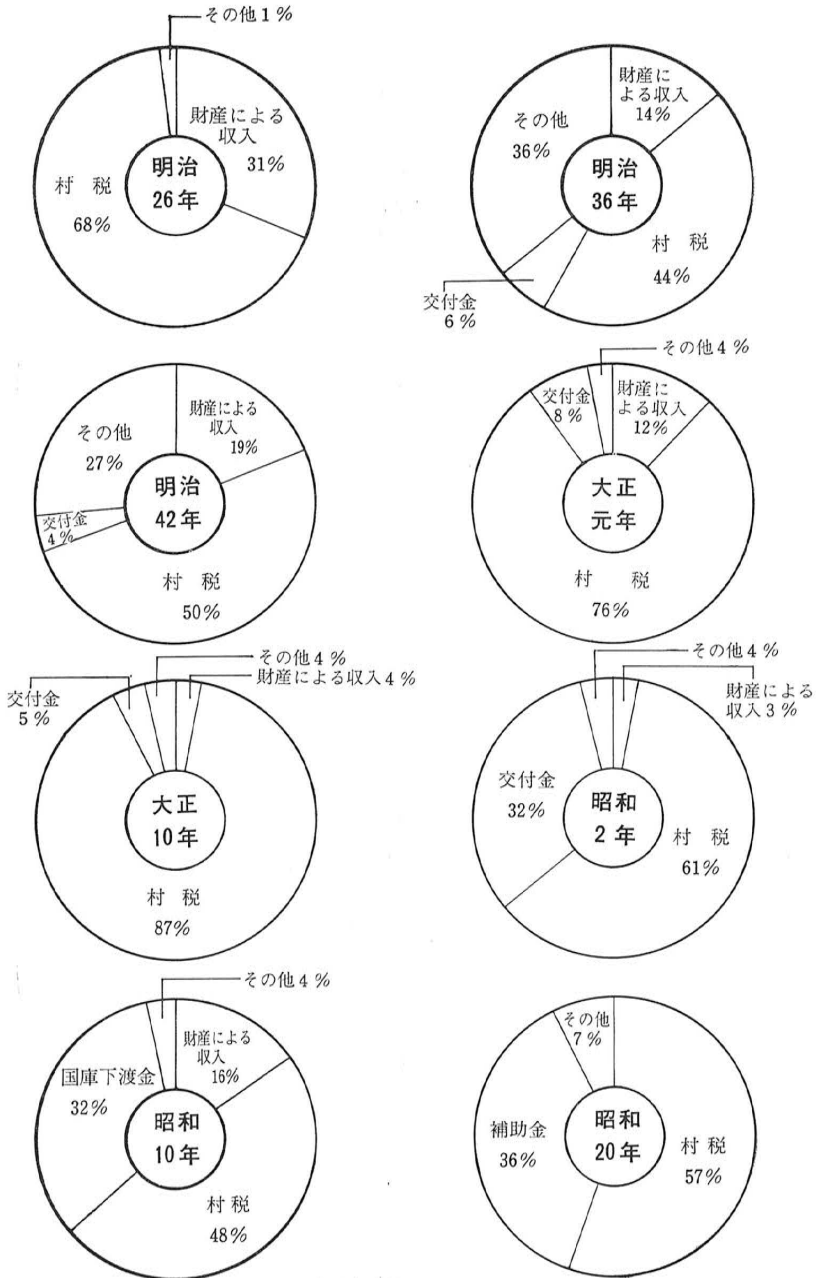
### 第二節 財政規模の変遷

中津村の経済を村の経常予算からみると、町村制実施の明治中期以来現在にいたるまで収入のほとんどを村税に依存している。村税は昭和二四年の地方税改正まで地価割、

# 歳出状況



歳入状況





戸数割、営業割の三本立てで徴集している。

地価割は土地の所有面積や地目によって割出されており、現在の固定資産税に相当する。戸数割は組長会で各戸を何段階かの等級に分け、議会にはかつて決定されたので、等級別に金額が定められていた。営業割は農業以外の営利目的の職業に対して課せられていた。収入のほとんどを村税でまかなわねばならない状態は、村自体があまり裕福でなかったことを示している。

歳出の面から見ると経常予算の大部分が役場費と教育費につき込まれている。村の発足当初は役場費に多く費やされているが、軌道に乗った頃からはだいたい歳出総額の四分の一度に落着き、教育費に総額の約半分が当てられている。このことは一つには明治政府の国民の無学解消策の現われであり、村としては部落がかけ離れているため多くの学校を持たなければならなかったことに起因する。

明治三七年前後からは村行政の立場から財産蓄積予算を樹てて財産作りに乗り出している。またいっぽう勸業費を計上して産業奨励に当たっていることがわかる。ただそれが、実際にどのような形で実施されたかについては記録が

ないため明らかでない。

## 第四章 教育

### 第一節 学校のおいたち

明治五年八月に学制が発布されたが、本村ではしばらくは従来の寺小屋の教育がつけられたようである。

明治八年に久主校、宮成校（黒藤川）が開校し、その後、二箇校、鉢校、沢渡校ができていた。沢渡校は沢渡部落から山を越した弘形村の平井におかれ、これまで仕出村の学校に通った児童は平井に通うことになった。

明治一五年九月一五日に郡内各村の小学校を視察した学務雇金子長斉が松垣郡長に提出した復命書によると三村関係の学校状況は左記の通りである。

村名	校名	戸数	学令就学 人員生徒	校舍	教員	給料
久主	久主	一六二戸	六〇三〇	新築	竹下正静	五円
黒藤川	鉢分校	九八戸	七〇二三	寺院	福石繁蔵	年給二五円
同	共	九八戸	六一二八	寺院	欠	八円
同	二箇分校	三四戸	二四二三	堂		

そのころの小学校がどのようなであったかを見る一資料として明治一五年一月に上浮穴郡講習処教員心得宮脇好尊の「久万郷小学巡回日誌」というものを見ると、学校とは名ばかりの不完全なものであったことがわかる。

十一月四日出立、午前第十一時日浦村光明校へ着、休業セリ、其校前ノ貼出シニ曰ク、例ニヨリ十月十八日ヨリ十一月廿一日迄休業ス云々ト、然ルニ此事タル在庁中未ダ届ヲ見ザレバ或ハ無届ナラント察シ、質サントスレドモ教員ハ松山へ罷歸リ、後ニ残ルハ机ト塵埃ノミナレバ如何トモスルナク、其上戸長ハ不在、依テ住寺ノ僧ニ前日ノ模様ヲ探ルニ、過日閉校前マデハ二、三十名ヅツハ出校セリト、斯クテ止ムベキ事ナラネバ夫ヨリ分校へ馳セツケタリ、

同月同日、同校分校コレマタ休業セリ、依テ仮教員(学務委員ニテ当分教授ス)ニ面接シ委曲質シミレバ、此節丁度農繁ニツキ二週間休校致シタキ段、戸長へ届ケ置キタレバ定メテ書面ノ出テ居ルナラン云々、ソレヨリ本年就学人員調べ或ハ其他、校ニ備置ベキ諸帳簿等一切整ハズ、且ツ登校生モ少キト聞ケバ、縷々成規ノ旨ヲ論シ諸

科ノ教授方法等ヲ懇説シ置キタリ、

これは例外ではない。他の校も大同小異で指導監督も骨の折れた事であろうと推察される。

こうした中であつて校舎を新築した久主校は大した意気込みであつたと想像される。右の巡回日誌の中から久主校の分を抄録して見よう。

同月九日、久主村久主校視察、午前第八時出校、当日生徒二十六人、当校ハ新築セシモノナレバ久万山奥ニハ絶無ノ壯觀ニテ亜壁玻璃窓清爽拭フガ如シ、併シ其外觀ニ比シテハ教師ハ安給ナレドモ、甚ダシク不都合ニモアラズ、サテ教員ノ人トナリモ温順ニシテ可ナリ、然ル処、就学人員百以上モアリテ出校生ノ僅少ナルヲ以テ学務委員ヲ呼出シ精々出校ヲ致サス様督責シ、教員ニハ授業ノ方法、備置諸帳簿ノ件等ヲ論シ置ク、

とある。白壁にガラス窓の久主校は久万郷では先端を行く異色の校舎であつたようであるが、教師の月給五円は当時としても安かつたようであるし、校舎に比して就学率は低かつた。黒藤川校はもとの名は宮成校であるが、初期は「共分校」と呼んでいたようである。また平井校について

は、明治一五年記録には、

仕出学校モ仕出村ト沢渡村ト半季代リテ位置ヲ交換スル  
由、

と記されているから、半年交代に児童は平井へ、或は仕出  
へと移動していたのであろうか。

さて明治四三年九月発行の「上浮穴郡案内」(小川薫水編)  
に次のようにある。

沢渡尋常小学校 校長 大窪 傳次、大窪 マチ

鉢 尋常小学校 校長 岡本 尚宗、岡本カナメ

久主尋常小学校 校長 高岡 今平、土居 通栄、亀井 カズ

宮成尋常小学校 校長 安川幸太郎、安川 富子

沢渡分校がつけられたことについて、沢渡の篠崎雅吉は  
「系譜の足跡」という手記の中に、祖父佐吉からの聞き書  
を載せている。その大要は次のようである。

明治期の沢渡に学校はなかった。子供達は平井にある学  
校に通っていた。戸数八軒のこの平井は面河川の左岸に  
あって、当然中津村分であるべきなのに奇妙なことに行  
政的には対岸の弘形村大字日野浦の一部落となってい  
た。更に奇妙なのはこの学校名が中津村立沢渡尋常小学

校である。校舎校庭はお粗末至極で校舎は民家としか見  
えない茅屋で、この学校に地元平井と沢渡・二箇の子供  
が山越えして学んでいた。

明治四三年のころ篠崎佐吉は村の学務委員をつとめてい  
たが、現状では二箇の奥の長崎の子供は遠くて通えない  
し、中津村の学校を他村におくことの矛盾と、不完全な  
施設設備を解消して沢渡と二箇に二校を新設する必要を  
説いた。これは誰の目にも至極当然なことであったか  
ら、中津村としても早速に所要の手続きをとった。しか  
し県からの認可は、なかなか下りず、視学の実地踏査が  
行われてようやく中津村の申請どおり平井の学校を解消  
し、二箇と沢渡に黒藤川小学校の分校を設置することが  
認可された。

沢渡分校の開校は明治四五年年度の新学期からだった。し  
かし当時のこと、校舎の建築から机・椅子の一つ一つま  
で大工が作るので新学期には間に合わず、二、三週間、  
児童はこれまでの平井に通って、完成するのを待った。  
この年新分校への入学生は四名だった。(下略)

高等小学校ははじめ上浮穴郡内には久万町にしかなかった。これは組合立で中津村もこの組合に属していたが遠くで不便なため、柳谷村と共同で落出高等小学校を設けて、ここに通うことになった。明治四二年に義務教育が延長されて尋常小学校四年が六年となった。高等小学校四年は二年に改められた。この機会に久主尋常小学校に高等科が置かれ、久主尋常高等小学校となった。黒藤川の宮成に高等科が置かれたのは、これよりは遅れる。

昭和一六年に国民学校と改称したが、戦後の昭和二二年に、久主に久主小学校・久主中学校、鉢に鉢小学校、黒藤川に黒藤川小学校・黒藤川中学校、二箇に二箇小学校、沢渡に沢渡小学校というように校名を改めまた新制中学校が生れた。さらに昭和三〇年に久主小学校を中津小学校、久主中学校を中津中学校とし、鉢小学校は廃校となった。

## 第二節 各校の沿革

### 一、黒藤川小学校

明治 八年 宮成校開校

〃 一七七〇年ごろ 宮成簡易小学校

〃 一三三年九月一八日 正泉寺にて一四名の児童を大西峯

〃 二四年頃 二教員指導

〃 二五年頃 宮成尋常小学校

〃 二五年 教員山田貢(四・一二)、若谷竹

松(九・一)増田徳三郎(一一・

六)着任

大正 二年 校地拡張(七月)・校舎拡張(二

月)完成

〃 六年六月二日 宮成農業補習学校設置

「黒藤川小学校沿革誌」によると、昭和四年には宮成尋常小学校から中津尋常高等小学校となっているが、いつ改称されたのかは不明である。この年、二箇高等科生委託のため学級増となり、一教室増築している。

昭和 五年 校章・会歌制定、全校対象の教育テスト実

施、五・六年生対象の県教育テスト実施、知

能テスト実施(大阪市案個人テスト)後援会

発足

〃 六年 校舎屋根替 校旗(田野為太郎寄贈)

〃 一〇年 青年訓練所入所式

〃 一一年 校名改称 黒藤川小学校・黒藤川青年学校

〃 一四年 二箇校下高等科生、二箇高等小学校に就学

〃 一六年 現校舍完成、二学期より入る、国民学校制実

施

〃 一九年 運動場の耕作化、五月に三分の一、のち三分

の二

〃 二〇年 四月より母親学級開始、六月二日学徒隊結

成、武道（柔道・剣道・長刀）廃止、修身・

国史・地理停止。三学期からはこれに伴う教

科書・図書・掛図・設備々品処分。児童、ド

ングリ拾いなどに精出す。

〃 二二年 中津村立黒藤川小学校と改称、高等科廃止と

なり新制中学が発足

### 歴代校長氏名

年代不明安川幸太郎、明治四五年久保雅晴、大正三年橋本

栄、大正六年伊賀上 武、昭和四年大上鷹信、昭和五年光

田繁光、昭和七年岡田虎太郎、昭和一年東右一郎、昭和

一五年白石堅雄、昭和一八年西内清巳、昭和二一年西田伝

吉、昭和二四年渡部綱賀、昭和二六年森岡通一、昭和三〇年西森文雄

### 一、二箇小学校

明治一二年頃 宮成校の分校

〃 一七年頃 簡易小学校

〃 二四年頃 尋常小学校

〃 三四年 弘形村平井が二箇・沢渡の中央にあたる

ため、こゝに沢渡尋常小学校ができる。

〃 四四年 二箇・沢渡両部落に一枚ずつ学校を置く

こととなり、各々校舎を建て、宮成尋常

小学校の分校とする。

〃 四五年 二箇分教場落成五月一日、生徒数約三

〇名。

昭和 三年 高等科設置される。

〃 四年 訓導森 正彦、馬越卓量、伊賀定子、九

月一日二箇尋常小学校と改称、沢渡分教

場は二箇尋常小学校の分教場となる。

〃 一〇年 二箇尋常小学校校舎落成式（七月一九



日)

大正 四年

阿部某着任

昭和一四年 高等科併設、二籠尋常高等小学校と改称

昭和 四年

片岡善太郎着任、沢渡分教場は二籠尋常小学校の分教場となる

(九月一日)

〃 一六年 国民学校となる

〃 二二年

学制改革六・三・三制実施、二籠小学校と改称

#### 四、中津小学校

明治 八年

久主校開校

#### 歴代校長氏名

〃 一八年

久主中田に簡易小学校

昭和四年片岡善太郎、昭和一四年森岡久雄、昭和一六年阪

〃 二四年頃

久主尋常小学校と改称

本 最、昭和二二年大沢 勇、昭和二五年高石行信

〃 四二年

校地及び校舎狭小のため、移転改築工事開始

#### 三、沢渡分校

〃 四三年

久主尋常高等小学校となる

明治一二年頃 仕七川村仕出校に通学していたが、この

大正 四年

久主実業補習学校設置

ころ沢渡に学校をおく

〃 八年

高等科第三学年を置く

〃 一七年頃 簡易小学校

〃 一五年

中津村立久主青年訓練所併設

〃 三四年 沢渡尋常小学校を弘形村日野浦平井に設

昭和 三年

高等科第三学年廃止

置

〃 六年

運動場拡張工事開始

〃 四四年 沢渡・二籠に学校を置く。二校とも宮成

〃 八年

校舎増築開始、九年三月落成

尋常小学校の分校となる

〃 一六年

久主国民学校と改称

〃 四五年 沢渡分教場落成

〃 二〇年

柳谷村休場部落の児童の通学する者が多

い

昭和二年 学制改革により久主小学校と改称、同時に久主中学校併設

〃 二三年

校地拡張工事開始、五月終了、分教場として、中田に五年、西村に三年、窪田に一年を置く

〃 二五年

鉢小学校を廃止、本校の分校となる。六月校舎改築工事起工

〃 二六年

工事竣工

〃 二八年

へき地一級指定

〃 三〇年三月三十一日 柳谷村と合併し、柳谷村立久主小学校、次いで中津小学校と改称

### 歴代校長氏名

明治一八年丹下光煥(中間不明)、明治三四年正岡景敏、明治三五年山口政太郎、明治三七年丹下直樹、明治三九年大上鷹信、明治四〇年尾上高太郎、明治四一年高岡今平、大正二年長賀部弾正、大正七年武智政種、大正一〇年宮岡留次、大正一一年岡田留次、大正一三年高岡茂吉、昭和二年石居貞邦、昭和三年土居衛、昭和八年山之内均、昭和一三

年先田安市、昭和一五年鈴木幸栄、昭和一七年小椋秀雄、昭和二一年中越長次郎、昭和二五年小椋隣次郎、昭和二七年高岸 勝

### 五、鉢 小 学 校

大正一四年、熊石太郎は明治四〇年頃の学務委員天崎太郎の話を聞いて次のように記している。

明治八年一〇月三十一日、ワトチの民家を借りて鉢校が開校、教員に鉢の福石茂蔵がなり、その後福田忠次の宅に移り宇摩郡土居の長野近太郎が就任、後に鈴木重雄、田村英雄、土居利明つゞいて就職する。鉢薬師の麓に移転したが明治一九年暴風のため倒れ、二〇年頃新築し明治四一年今の馬ゴヤシに移転し新築する。

また明治四〇年一月当時の教員岡本尚宗は

(中略) 明治八年一二月黒藤川第二分校と称せしが後鉢簡易小学校と改称せられ、更に鉢尋常小学校となる。然れども民家と異ならず、設備その他万般不完全、適々(中略) 四一年四月三日を以て落成、設備完全し校具等一変するの機運に遭遇したり、

と、記している。

明治四一年馬ゴヤシに平屋草葺校舎落成、児童四一名

(戸数八六戸 学令児童七〇名)

昭和一六年 鉢国民学校

〃 二二年 中津村立鉢小学校

〃 二五年 久主小学校の分校となる

〃 二八年 へき地二級指定

歴代校長及び教員氏名

明治八年福石茂藏、その後長野近太郎、鈴木重雄、田村英雄、土居利明、今川五郎、尾上高太郎、明治三〇年秋山正道、明治三一年中城又一、明治三二年森猪三郎、明治三三年近沢晴美・鈴木茂太郎、明治三四年山口政太郎、明治三五年棟田照三郎、明治三六年表吉慶・高岡正一、明治三七年岡本品治・岡本尚宗、大正元年阿部和明、大正三年佐伯宗速、大正四年豊田馬次郎、大正六年吉岡好吉、大正七年中田久雄・福田宗八、大正九年熊石太郎、昭和六年乃万換、昭和八年工藤濱太郎、昭和二年大西清馬、昭和二四年石田長市

六、黒藤川中学校

黒藤川小学校区と二箇小学校区、弘形村大字日野浦の栄重・藤社部落を委託生とし、その交換条件として、沢渡校区を弘形中学校委託生としている。

中津村大字黒藤川六六番地、旧青年学校々舎を仮校舎として、

昭和二二年 中津村立黒藤川中学校開校

〃 二三年 校章制定(黒藤の花を圖案化)

〃 二八年 新校舎落成

歴代校長氏名

昭和二二年土居 衛、昭和三〇年小坂邦満

七、久主中学校

昭和二二年発足(生徒数一年三七名、二年二四名、第三学年は非義務制のためわずか五名)校舎は久主小学校を使用、教室不足のため大寂寺本堂の一室を借用

昭和二四年 新校舎に移転  
 〃 二五年 校庭第一期拡張工事に着手

昭和二六年 校庭第二期拡張工事に着手

〃 二七年 学校敷地拡張工事開始

〃 三〇年 町村合併により、柳谷村立久主中学校と改称

歴代校長氏名

昭和二二年中越長次郎、昭和二九年浪瀧藤十郎

### 中津村教育委員会

地方教育委員会法の施行により、昭和二七年一月一日中津村教育委員会が設置された。教員人事をはじめ教育行政を担当することとなり、教育の向上に大きな力となった。

### 農業補習学校

小学校を卒業しても尚勉学と農事実習を希望する者のために、大正四年久主、大正六年宮成（黒藤川）に農業補習学校が設置された。

教師は小学校訓導が兼任し、主として夜間授業であった。のち専科教員も任命された。

### 青年訓練所

大正一五年、中津村立久主青年訓練所が、また同じく黒藤川にも設置され、次第に軍事色を強めた。

### 青年学校

従来 of 青年訓練所を廃し、昭和一〇年久主と黒藤川に青年学校が併置された。軍事思想の鼓吹と、公民教育をさせることを目的に以前の補習学校・青年訓練所の教科内容を一本化し、教育を行なった。

## 第五章 交通・通信

### 第一節 交通

道路 明治二三年に、現在の国道三三号線の磯ヶ成から両国橋までの県道が開通するまでの村内の道路は、山腹をまわる里道で、かろうじて牛や馬が通れるくらいのものであった。県道が開通すると定員六人くらいの客馬車や、荷物



土佐街道の12里石

を運ぶ牛馬車が通うようになった。これもはじめの二輪車から四輪車にかわって行った。

また昭和一四、五年ごろ二匁に通ずる道路が出来、二六、七年には窪内農道が出来た。

古くからあるものに土佐街道が二匁山中を尾根伝いに西から東へ通じていた。山中の小道は木の枝のように多いと言われるが、この街道に出る道が幾つもあり、それは仕七川村の蓑川・中村の方へも通じていた。

**橋** 一面河川を距てた対岸の村との往來のために七カ所の渡船場があった。沢渡・平井・馬門(ガヤゼの渡し)、黒藤川(古床の渡し)・落出・鉢(オリトの渡し)・久主(ヒロズナの渡し)がそれである。

これが橋に替っていったのは大正の末からである。まず沢渡に吊り橋がかかり、同じく大正一一年に落出の吊り橋、大正一四年一月一四日に中津大橋、昭和になって平

面河川の橋



井橋、一〇年に落出大橋、二八年一月一二日に沈下橋が出来て、生活の上になきな利便を与えるようになった。架橋についても先人の並々ならぬ苦心と努力があった。いま沢渡橋の架橋について、篠崎雅吉の手記「系譜の足跡」を引いてみよう。

大正中期まで沢渡の裾を洗っている面河川に橋はなかった。渡し場があった一艘の舟が通っていた。昔は水量も豊かで牛や馬も舟に乗せて渡していたが、農林産物の出荷などには不便だったし、大雨が降れば川止めとなって対岸との往來は絶えてしまう。沢渡に住む篠崎佐吉は郡会議員や村の助役などの役職を退いてから、多年考えつつ果さなかつた吊り橋をここに架ける夢を実現したいと考えた。彼の手もとに

は、かつて郡會議員として東北の視察旅行をしたときに入手した吊り橋の設計図があった。

佐吉はできることなら公費で架橋してもらいたいと関係当局に折衝してみた。しかし県道のつなぎにもならない橋を真剣に検討してくれるわけがない。県道からはずれた橋を五十戸たらずの部落のために架けてはくれない。だいいち、見本となる橋はどこにも架かってはいない。自力で架橋にふみ切るしかなかった。

架橋について佐吉は熱心に近隣の人々に説き、部落總會を開くこと連続六回に及んだ。しかし郡内のどこを歩いてみても佐吉のいう吊り橋などはない。前代未聞の事を起そうというのだから或る程度の時間をかけるのも止むを得なかった。

けっきよく吊橋をかける事には賛成、しかし工事費の出費はしない、部落としては工事竣工までの労力提供、用材は各自の任意拠出、落成式費用は部落持ち、架線吊線その他資材購入費は佐吉の責任とするという大綱を總會で決議し架橋委員に佐吉を別格とし、阪本友太郎・山内一吉・谷松賀・和泉増衛を選出した。

工事の技術面は桜木玉之進を中心に、手先の器用な人達が佐吉の示した設計図とその説明を聞いて、工夫を重ね知恵を結集してこの新しい橋の築造と取り組んだ。玉之進は模型の橋を作って工夫を重ねた。そして「これなら出来る」という結論に達した。渡し場は一変して築城工事場のような騒ぎになった。長い杉丸太で櫓が組まれ、人々の「よいとまけ」の掛声がとどろいた。切り口に樹液のにじむ松丸太がどしんと、どしんと地底に届けとばかり、幾本とも知れず打ち込まれた。その上へ縦横に松丸太を詰め、橋台石垣の基盤造りをした。土中の生松材は一世紀たっても腐蝕しきることはなからう。この上に城郭の石垣に劣らぬ橋台石垣を構築した。百数十貫もある大石を太い藤かざらで引きよせ櫓の滑車で吊り、石垣を積み上げていった。太い藤かざらは百余貫の石を吊り上げてもたやすく切れるものではない。この藤かざら山から採ってくるのは山にくわしい中山初太郎の役目だった。架橋に要する木材の松・樺・栗などの自然木は山で大きくなり放題で、値よく売れる時代ではなかった。佐吉も部落の人もどしどし持ち山から伐り出した。

佐吉は架線となるワイヤーロープ、その他の資材を大阪へ発注した。支出面に関することはすべて佐吉の責任、佐吉は近郷の有志をたずねては寄附を募ってまわった。このころ二箇奥の深山に既に製材機が入りこんでいた。

山間部ではまだ昔ながらの木挽作業だったのに、どこの大企業の出先事業所だったのか、この移動製材機の製品は搬出されぬまま奥山に山の如く積まれていた。沢渡に大きな橋が架けられると知った山奥の製材所は橋板・欄干・橋桁などの用材の寄附に快く応じてくれた。

橋が竣工するまでに二年を要した。部落民が佐吉に協調し、私欲を捨てて大同団結した成果であった。何十人が何列になって渡ろうと、荷駄が何頭一度に渡ろうと、聊かの不安もない長さ約九〇材の吊り橋が出来上った。中間部にいくらかのゆれはあっても、それは吊橋の特性で脆弱性を示すものではない。仁淀川における長吊り橋の嚆矢であった。

ところが思いもかけぬ一大事が起った。交通取締り権を持つ警察が、事前通告もせずいきなり通行禁止の繩張りをしてしまった。落成式こそ挙げてないが、既に人々

は通行していたので、これには責任者の佐吉も困惑した。佐吉は筋を踏んでむだな時間を費すことをやめて、直接知事の許可を得ようと決心した。郡役所や警察署のある久万町をす通りして松山に出た。そしてかつて郡会議員として議席を並べていた久松定夫を尋ねた。久松は田渡村出身で上浮穴郡選出の県会議員だったが、彼に羽織袴を借りて単身県庁に出かけた。時の知事は剛腹と手腕をうたわれた十七代の官選知事若林資藏だったが、郡会議員・助役などの経歴ありとはいえ、田舎者の正式な小学校にさえ行っていない佐吉が、ろくろく知事官房に断りもせず直接知事室に乗り込んだというのだから、剛腹というの外はない。佐吉は知事に対する敬語も知らない。ただ架橋を思い立った事情から工事経過思いがけぬ通行止めに困惑している実状からその撤回要請を誠心誠意で訴えた。佐吉の陳述の間、一言も発せずソファーで瞑目したままだった知事は、聞き終ると、やおら姿勢を起して、「よく承りました」と一言だけ言った。佐吉は「よろしくお頼み申します」と深く頭を下げた。

その夜、引とめられるまま久松邸に一泊して旧交を温め

た佐吉は、翌日の夕暮れに橋に帰りついた。既に通行止め  
の繩は取り除けられていた。巡査が来てははずして帰つ  
たという。

どれほどこの川に狂奔濁流が押し寄せ、水かさが増そう  
とも平然たる吊橋が沢渡部落の裾と対岸の県道とを連結  
した。だが公橋という見地からすれば荷重耐力検査を経  
なければならなかった。村費を支出しない橋とはいへ、  
中津村としてもこの段階に至って知らん顔は出来ない。  
荷重耐力検査はセメントの樽に砂をつめて、検査官の指  
示する個数だけ橋上に並べるのだった。

佐吉はこっそりと樽の中に鉋屑をつめて底上げし、その  
上に砂を入れさせた。「もし中味を調べるといふ時はこ  
れとこれの樽の砂を出せ」と使役に出た人夫に指示して  
おくことを忘れなかった。こうして荷重耐力検査も無事  
にすませることができた。

こうして初代の沢渡橋は誕生し、村橋に編入された。架  
橋によって日常生活における利便は計り知れぬものがあ  
った。それは沢渡部落のみにとどまらず、さらに奥の二  
箇・置俵・長崎の部落まで、人馬の往来はいうに及ば

ず、物資の搬出入に多大の便宜をもたらした。まさに大  
正文明の流入口と言うべきものとなった。

大正七年の早春に完成した橋の祝賀式はその年の秋に行  
われた。橋上は万国旗で飾られ、式は橋畔の空地で行わ  
れた。来賓には警察署長も郡会議員も村外から来ていた  
し地元の中津村長亀井要、小学校長ら、沢渡の人々はす  
べて集り、沢渡分校の児童も整列した。式は「君ケ代」  
の斉唱から神官の祝詞に始まった。村長・署長・郡会議  
員・小学校長の祝辞が次々とつづいた。いま残っている  
久主尋常高等小学校校長賀部弾丞の見事な筆跡の祝辞を  
載せて、当時をしのんでみたい。

#### 祝 辞

沢渡橋架築工事ヲ竣へ茲ニ本日ノ吉辰ヲトシテ落成開  
通式ノ盛典ヲ挙行セラル不肖亦此ノ盛式ノ末席ヲ汚ス  
ヲ得シハ最モ光榮トスル所タリ、

惟フニ国家発展ノ要素ハ或ハ教育ノ進歩・産業ノ興  
振・交通機関ノ完備等其他幾多ノ計設ヲ要スルヤ言ヲ  
待タズト雖モ国家進展ノ基礎ハ人智ノ開発ニアリ、而  
シテ社会ノ文明ニ適応シ人智ノ啓発ヲ期センニハ夫レ



交通機関ノ完備ヲ待ツテ彼此ノ長短ヲ相補ヒ有無相通ズルノ道ヲ講ズルニ非ズンバ之ヲ得ント欲スルモ能ハザルハ兒童モ亦能ク了解セル所、然ルニ中津村沢渡ハ四国山脈ノ中軸ニ位スル僻陬ノ一部落ニシテ従来交通ノ便甚ダ薄ク、為ニ蒙ル所ノ損失ノ甚大ナルハ地方人士ノ久シク憂慮セシ所タリ、

此ニ於テカ中津村長亀井要氏、篤志家篠崎佐吉氏ヲ始メ諸有志ノ蹶起スル所トナリ幾多ノ障碍ト幾多ノ困危トヲ排シ莫大ノ経費ヲ投ジテ此ノ大工事ヲ竣成セラル其間ニ於ケル委員等々関係者ノ苦心経営ハ徒ラニ余人ノ洞察シ難キ所アルベシト雖モ自今是レガ恩恵ニ浴スル地方人士ノ幸福ヤ惟ヒ半ニ過グルモノアルベキヲ信ズ、亦以テ地方ノ為邦家ノ為慶賀ノ至リニ堪エズ、特ニ本橋ハ類例稀ナル釣橋ニシテ其規模ノ宏大ト其ノ外観ノ美ハ予土街道ノ一大偉觀タルト共ニ亦以テ四国島ノ一名橋タルニ愧ヂザルベシ、聊カ蕪辭ヲ述ベテ祝辭ニ代フ

大正七年十月二十日

久主尋常高等小学校長 長賀部彈丞

来賓の祝辭が終ると、沢渡分校兒童は阿部和明教師のオルガンに合せて、阿部教師の作詞作曲になる「沢渡橋頌歌」を斉唱した。

明神ヶ岳聳え立ち 面河の流れ水清く

矢を射る如き急流の 岩に激して玉と散る

世は大正の文明に 流れを一つ隔ては

一度び雨の降る毎に 行き交う事の不便あり

……………

頌歌は長く、村人の協力団結と佐吉はじめ役員たちの功績を讃えるものであった。全員が改めて橋の渡り初めに移ったとき、突如日露の役に従軍したラツパ手、森岡好五郎の吹くラツパの音が高らかに響きはじめた。

なお篠崎雅吉によれば、大正期には上浮穴郡の地理・風俗・名物名所を歌いこんだ数十節にわたる作者不明の歌があったそうである。沢渡橋が出来てから、いつ誰が挿入したか、この郡歌の中に次のような一節が加えられたという。

二篋矢竹を杖にして 沢渡橋をうち渡り

頼政公の母君に ゆかりの深き赤蔵ヶ池

というのだそうである。この歌を知っている人が現在いるであろうか。

## 第二節 通信

郵便制度は明治六年にできたのであるが、本村では、明治一四年一月二日に久主村郵便取扱所が設置され、これがやがて久主郵便局となったが、同三二年一月二五日にこれが落出へ移転し柳井川郵便局（現在の柳谷郵便局）と称するようになった。

明治四二年に柳井川郵便局で電報取扱いを開始し、昭和四年には電話が設置されている。

昭和一一年、中津郵便局が設置された。ここでは為替や貯金の取扱いだけで、集配は行なわれていなかった。

# 第六章 治安と消防

## 第一節 治安

本郡では明治六年二月一〇日、取締番人（現在の久万警察

署）ができ、久万に本屯所、七鳥村に第一支屯所、柳井川村に第二支屯所が設置された。明治四年、取締番人を羅卒、同年一〇月に巡査と称した。

明治一〇年二月に松山警察署久万分署と日ノ浦分署ができたため、はじめて巡査の姿を見かけるようになったが、それまではほとんど巡査の姿を見ることはなかった。

古老の話によると、明治期に黒藤川に駐在所ができ、その後、磯ヶ成・西之谷（昭和三〇年一月一日合併する）にもあったという。現在の黒藤川駐在所は、大正一五年一〇月一六日に設けられたものであり、ここには大正四年一二月八日からの歴代巡査氏名等の記録が残っている。

### 黒藤川駐在所巡査氏名

浜田 雅吉	相原 一馬	久保喜久雄	河村辰太郎
菅野 林蔵	今井計太郎	森 義夫	西坂 清一
是沢 雅雄	日高 喜儀	松浦万次郎	宮内 盛彦
佐治 賀政	山内 善一	山内 的三	石丸 徳一
河合 憲吉	久本 季雄	平岡 薫	崎山 義忠
大西 実	西之谷重春	武智 数男	和田 寛一
山崎 三郎	山田 紀一	岡田池我次郎	竹崎 猶衛

浅海 重清 平田 国一 門田 文雄

## 第二節 消防

本村では大正初期に消防組が結成された。人々の生命・身体および財産を火災から保護すると共に、水害・地震等の被害を軽減することを重要な任務とした。時には警察の要請に基づき、治安維持のために協力することも任務とした。

### 一、消防団のころ

組頭（一名）の下に第一部長久主、第二部長黒藤川、第三部長二籠・沢渡がおり、各部長の下にそれぞれ三名の小頭がいた。

#### 道具・服装

腕用ポンプ 各部とも最低一台はおかれていたが、各部によって購入した年や数の差があった。

まとい 中津村消防組として一本

鳶口 各部とも約一〇本以上

服装 はっぴ

### 二、警防団のころ

昭和一一年九月の警防団令によって、これまでの消防組が新たに警防団となった。本村では昭和一五年ごろであった。警防団は村の治安や戦時下の村の防衛にあたった。

上浮穴郡の警防団の団長一名は警察署長が兼ね、その下に副団長二名があり、中津村では久主に第一分団長、黒藤川に第二分団長、二籠・沢渡に第三分団長がおかれ、各分団の下に三人の班長があった。

#### 道具・服装

道具はあまり以前と変化なく、服装は、はっぴから制服へと移り、胸の印で格付けをしていた。

### 三、消防団へ

そして、昭和二三年ごろ警防団から現在の消防団に改称されるに至った。

消防の団長一名は村長が兼任、副団長一名、その下に久主に第一分団長、黒藤川に第二分団長、二籠・沢渡に第三分団長がおかれ、第一分団では鉢・西之谷・岩川・中田・

窪内・西村の六組があり、第二分団では稲村・上組・中組の三組、第三分団では置俵・長崎・二籠・沢渡の四組があり、各組には組長、その下に中津全体で一二〇名程度の団員がいた。

### 道具・服装

次第に消火器の改良によって消火作業は能率的となり、人々の生命・身体・財産も火災から保護できる率が高くなった。服装等については警防団の時とあまり変わっていない。

## 第七章 民俗

### 第一節 衣・食・住

#### 一、衣服

農民は麻を作り、家でつむぎ布にし、雪ばかま・はんてん・でんち・胸かけなどを作って着た。毎年一度は「コギノ」と言つて木綿の縞物を買ひ、嫁が家で縫うのがならわ

しで、祝祭日などに着た。これが古くなると仕事着につくりかえた。

麻の布は久万町の徳兵衛紺屋という染物屋に頼んで染めてもらつていた。

#### 二、食物と農耕

中津村はどの部落も山峡で水田が少なく、主な農産物は、とうもろこし・麦・そば・茶・みつまた・楮こうぞ・麻等である。

水田の少ない中津村にも、沢渡部落の米は味がよく「沢渡米まじ」として郡内に名が知られていた。

昔から裕福な家庭は少なく、昭和二〇年頃までは、主食はとうもろこしや麦であった。米を食べるのは正月の三日間と、盆と祭ぐらいのものである。祝祭日には、手打ちそばをよく作つて食べ、あわもちや、よもぎもち、とうきびもちなどもよく作られたが、これは米を節約するためでもあった。

又、毎年のように台風やかんばつに見舞われ、農民の多くは野山の「ほぜ」の根を掘つて食べたという。この植物

は、毒草なので、根をよく洗い、大釜で木灰きばいを入れてゆで、ざるですり落とし、大きなはんば(浅いおけ)に入れ、ぬれ布をかぶせて清水せみずに三日間さらし、水分をきってだんごにし、みそ焼などにして食べたという。

又、貧しい家庭では、子どもが一〇才になると子守り奉公に出し、一五才になると娘奉公に出していた。子守り奉公では給金はもらわず、一年の内夏物と冬物の着物を一枚ずつ作ってもらうのがしきたりであった。

村が豊かか貧しいかは、神社の絵馬でわかるといわれる。豊かな村の社寺には、農民が豊作などのお礼に絵馬が奉納されたものである。この村の社寺には、絵馬が少い。

### 三、住 居

旧中津村といっても範囲も広く、部落によって多少の違いはあるが、急速に都会風にかわってきて、屋根が切妻で、かやぶきという家はめっきり少なくなってきた。

かやぶき屋根の家は、四〇年ほどたつと屋根のふきかえをせねばならなくなる。ふきかえる時は、部落全員が手伝うのがならわしである。部落の戸数が少ないため、人手が

足りないので「ゆい」をして仕事をした。「ゆい」とは、手間がえのことで、次にはお返しに必ず手伝うという約束語である。この村では「いい」と言っている。

屋根がえには、その他つぎのようなしきたりがある。手伝いに行く人は、わらなわ一束(一束は四〇ひろ。一ひろは両手をひろげた長さ)と、とうきび一升(一・八斗)を持参し、それで二番茶(午後二時の中食)のふるまいを受けることになっている。

建物の大きさは、三六(三間と六間)か三間ぱり(三間半と七間)がほとんどである。屋根に要するかやの量は約三〇〇〇束で、その内部落の各戸から四しめか五しめずつ出すならわしになっている。一しめとは五尺(一・五尺)のなわでしばった量をいう。なお、隅の方に使われるかやは短かめのもので、「翼」とよばれた。

屋根の下地には合掌用の松材一八本、たるき竹(円周約一五呎)、数十本・屋中竹(二二呎)、二〇本・仕元竹(七呎)、三〇〇本・なわ六〇束が使われた。

かやぶきの家は夏は涼しく、冬は暖かである。座敷は集会所がわりになるので広くとり、中央にはくりやけやきを

使った大黒柱がある。大黒柱は守護神と考え、お守り札などが貼られているが、目を見張るような大きな木が使われ、磨きがかけられ大切にあつかわれた。

茶の間は一竝四方もある「いろり」が必ず設けられ、暖をとったり、食事の際の団らん休息の場でもある。

住居に必要な飲料水は井戸はほとんどなく、湧水や流水を使用しているところが多い。

ふるは住居と切り離して建てられている。戦前（昭和二〇年）までは、糞尿が作物の肥料として使用されていたので、便所と隣合わせにし、洗い場は丸竹を床板のかわりに張り、洗い水が全部便所つぼに流れ込むようになっていた。だから便所つぼは驚くほど大きなものであった。

便所はふると同様住居と切り離し、棟を別にして家が、多いが、住居の中につくる場合は、不浄な所と考え、不幸をまねくというので必ず西方につくる風習となっていた。

各家には母屋はもやと隠居があるのがほとんどで、親子のトラブルをさける生活の知恵といえよう。

#### 四、婚 姻

昭和一五年頃までは結婚は娘の考えなどは無視されて、親が一方的にきめたものである。現代のような恋愛結婚は部落民から白眼視されたので、ほとんどみられなかった。しかし明治初年に、他にすぎな男がいながら親に強いられ、泣きの涙で結婚式にのぞんだが、その晩すぎな男が嫁さらいといって、さらっていったという話もある。

嫁とりは話がまとまれば、仲人が嫁方へ「済すみ酒」を持参して祝い、次に「頼たのめ」結納）といって、結納金と酒一升に白米一升を納めるのである。

結婚式には、仲人・新郎・両親・迎え嫁（女の子）と四人で嫁を迎えに行く。その時「樽たるにない」といって酒二升と鮮魚料を持参する。その内の一升は嫁方が新郎の家に持って行き、三々九度の酒とするのがならわしである。

嫁見の者が大ぜいくるほど、新郎の信用があるとされている。嫁を見に集まった人には祝い酒がふるまわれた。又、花嫁が出る時は、娘がとられることを惜しみ、部落の若者たちが墓石かえや肥こえたご等を通り道に置いてじゃまをし

た。花嫁を送り込むのに一と苦勞をするが、じゃまが多いほどよい嫁として、新郎の家族もよろこんだ。このような風習は近年みられなくなった。

## 五、葬 式

この村はほとんどが浄土宗である。葬式は古くからのしきたりで行われる。死人があると部落の長老に世話かたをお願いする。世話方は葬式全般のさい配を振うのである。

貼り方（棺桶をのせる輿台こしを金銀紙で張る）・墓穴掘り方（棺桶をうめる穴掘り役）、持ち方（死者の近親者より、位牌・香箱・しかけ花・まくらい・鳴り物などの持ち役）などの役を組の人や近親者に指名する。又、出棺の時は、鳴り物（銅羅どら・叩鉦たたきかね・妙みょう・八はち）を打ち鳴らして、参列者は大声で送り念仏の「ナンマイ・ダンボー」を繰り返しながら野辺の送りをする。

昭和一〇年ぐらゐまでは葬式に参列する人は、とうきび一升と一銭を受付けに渡し、墓から帰ると、「とき」といって「かゆ」のふるまいをうけて帰る。

葬式が終ると、「あと法事」といって近親者・世話役・

組の人は精進料理を受ける。食事が終わると歌念仏の「ナムアミダブツ」を、前半分とあと半分の二組に分かれて二〇分ぐらゐ唱えるのである。この念仏は現在もおこなわれている。

## 第二節 年中行事

### 一、中津明神の祭礼

黒藤川や稲村などを中心にした地方では、藩政時代から毎年六月二五日には、中津明神の祭礼が実施され、各戸から参拜に登山した。そのため、黒藤川の当家（当番の家）が道刈り、茶の世話などに出た。登山口にあたる元井谷部落の奥山では、そうめんを売ったり、駄菓子だかしを売る小屋こやがならび、にぎわった。

### 一、虫 供 養

明治末年まで行なわれた行事の一つに虫供養というのがあった。毎年田植がすむと部落民は朝から正泉寺に集まり、円形に座って大きな珠数を、順送りしながら「ナンマ

イダー」を唱える。又、暗くなると、五、六人の者が斉藤実盛のわら人形を作り、竹のかがり火をかざし、多くの者がかがり火を照らす中をくぐり抜け、下の川を渡り、八社神社の前の川へ人形を投げ込むのである。実盛は源氏の武将と一騎打をし、稲の刈り株につまづき、転んで首を討たれたという。そのため、実盛の霊が稲を恨み、稲を食う虫になったと言い伝えられ、豊作を祈願する祭事になったということである。

### 三、鬼のこんご

毎年一月一六日には各組で「鬼のこんご」という行事があった。長いしめなわを張り、中ほどにわらの「つと」に「かゆ」や「もち」などを入れて置くことである。日暮れになるとよその「鬼のこんご」を人に気づかれないように取りに行くのである。これも豊作を祈願する祭事のひとつである。

### 四、ご祈禱

昭和初年までは、病人が出ると、医者に行くよりも祈と

うをするのが普通であった。村に医者がいなかったのもあるが、重病人が出ると、千巻の祈禱といって、般若心経を一十巻となえるのである。各組の代表が手わけして部落をまわり、力をかけてもらう意味で、一銭か二銭を集めてまわった。現在の生活困窮者への資金カンパともいうのであろう。また大正時代までは、夏に早魃が続くと、部落総出でお寺やお宮に集まり、三日三晩、祈禱を休みなくこなうのである。「般若心経」のできる者はお寺へ、「大臣の被<sup>び</sup>」<sup>び</sup>ができる者はお宮へ、どちらもできないものは二手に別れて住職や宮司を中心に大太鼓をたたいて、天にむかって大声で「雨をたもれ竜宮洞、天竺<sup>てんじく</sup>天は曇れ」ととなえ続けるのである。女・子供は、にぎり弁当を送りとどけたものである。

これらの部落特有の祭礼儀式は、部落民の団結・連体感という結びつきの上からも意義深いものであるが、いつの間にか姿を消したことはさびしいかぎりである。

### 五、盆踊り

黒藤川地区では戦前まではお盆の一六日に男たちが正泉



寺に集まり、盆踊りをした。

まるく輪をつくり、各人がしめ太鼓を上下・左右は振り上げ、振りおろし、歌をうたいながら、ひろがったりせばまったりする、まことは簡単素朴で農民らしい踊りである。盆踊りというより、念仏踊りといった方があてはまっているようだ。

## 六、団七踊り

秋祭りには団七踊りがある。一〇才前後の男の子・女の子が踊るもので、「おつる」と「しのぶ」の姉妹が親の仇討をする踊りである。

陣鎌・長刀ながなたみなそろえたて エーイト ヨイ(はやし)

坂戸村にて百しょうの与太郎、ソーリヤ ヤットコセ

コレワイナ サー ヨーイヤナ

おとどい ひきつれ 田の草取りに、ヨーイト ヨイ

(以下略)

団七踊りの合い間に若者たちは、にわか芝居を晩までおこない、晩の八時頃からは、神楽が翌朝まで続けられる。

そのほか久万山万才も伝えられ、現在もその名ごりはあ

るが、踊りや民謡が姿を消し、知る人もほとんどいなくなつたことは残念なことである。

## 七、いのこ

おいのこさんは豊年を祝う子どもの祭事として現在も盛んにおこなわれている。

おいのこさんという人は

一で 俵をふんまいて

二で にっこりわろて

三で 酒を作りたて

四つ 世の中よいように

五つ いつものごとくなり

六つ むびょうそくさいに

七つ なにごとないように

八つ 屋敷をほりひろげ

九つ こぐらをたてならべ

十で とうとうおさまつた

エーイトモ エーイト(二籠)

エーイトナ エーイトナ(黒藤川)

その家でお礼をもらったら、続いて

ここの屋敷はよい屋敷

四方が高うて中びくで（中くぼ）

大判小判がずれこむ（すべりこむ）

エーイトモ エーイト

「いのこ」をつくわらたばは、さといもの茎くきをしんに入  
れてしばったもので、地面にたたきつけると、大へんよい  
音が出る。

いのこをつき終わったら柿の木にかけておくと、翌年、  
豊作になるという。

### 第三節 子どもの遊び

昔も今も遊びにあまり変わりはないが、男はたこ上げ、  
ぶちごま、ばっちゃん、輪まわし、ランコン、女は手まりつ  
ぎ、かるたとり、はねつき等が主な遊びで、それもすべて  
手製のものではあった。

手まり作りは、とうきびの毛（シャグマ又はシャゴマ）  
をしんにして、白糸でかたく巻き、五色の絹糸で山道くぐ  
りに糸を通し、六つ星の模様に刺しゅうしてできあがりで

ある。

### まりつき歌

ヒーヤ フーヤ ミーヤ ヨ

イツツヤ ムーヤ ナナツヤ

ヤツツヤ コノノヤ トー

とんとんたたたくは 誰たれじゃいな

けさもはよから 福の神

えびす 大黒 べん天さん

おこったおかおの びしゃもんさん

頭の長い ふくろくじゅ

おひげの白いは じゅろうじん

おなかのふとい ほていさん

七福神は ななえびす

遊びにはその他お正月に、六、七人で針打ち遊びがよく  
おこなわれた。

みんなが半紙を出し合い、針に糸を通し、一〇センチぐらい  
に切つてこぶしを作り、口に針をくわえて、指先で糸の端はし  
を持ち、半紙をめがけてピンと打ちたてる。半紙にたつて  
いるところをそつと持ち上げて取り合うのである。危険な

のと、針がへるのと、取り合うことはよくないといふのでよく注意をされたが、室内遊びとして、よくしたものである。

### 子守り歌

明治時代には、貧しいこの地方では一〇才になると子守り奉公に出されたので、子守り歌がはやったという。

ねんねんころりよ おころりよ

お前よい子じゃ ねんねしな

あのお山こえて 谷こえて

お山に咲いた 花取りに

つつじに つばきに ぼけの花

よい子のお前に みなあげよ

ねんねんしない子 わるい子じゃ

山の山うば こわいばば

ねんねんしなけりゃ くれてやる

ねんねんころりよ おころりよ

### 方言

昔は方言も多かったが義務教育の徹底と都会との交流、ラジオ、テレビの普及で、あまり聞かれなくなった。現在

でもよく使われる方言を少しあげてみよう。

ねんごろ (全部) ・いんまよ (きよなら) だんだん (ありがとう) ・やれこりや (さっそく) ・さいきよう (さしず) ・かたぐ (だます) ・まっこと (本当) ・ほれこそ (それこそ) ・せんち (便所) ・しょんべ (放尿) ・こっとい牛 (雄牛) ・だん馬 (めす馬) ・へっこい (しぶとい) ねんだらくさい (めんどくさい) ・へらこい (きも玉の大きい) ・そんつらなこと (そんなこと) ・どつらべらこい (おうちゃくな) ・そげい (そんなに) ・あげい (あんなに) ・いけねや (いけません) など。

また方言のみでなく、高知県境にあるので土佐なまりが強い。語調が鼻にかかり、語尾に「の・が・け」がつく場合が多い。

## 第八章 伝説と旧跡

中津村の名所、旧跡のおもなものは美川村の観光、文化財の部に採り上げたので、ここでは重複を避けて、その他の二、三について記すことにする。

## 一、大寂寺と長者屋敷

頼政の母は伊予の浮穴四郎為世の孫、河野氏長者親孝の庶兄寺町加賀守宗綱の女で、源仲政の妻となり頼政を生んだと伝える。

頼政は天下無双の弓取りになり浮孔郡の中津を賜り、久栖村（久主）に館を築き、城代土岐・由井の二士に母を護らせた。

母親は頼政の出世を頼って二篋に住み、弓矢をつくって都におくったり、二篋の奥にある赤蔵ヶ池で毎日水垢離を取り神に祈った。

二三日目の満願の日に朝早く起きて池へ行き、いつものように水垢離を取っていると、水面にうつった姿は自分ではなく、頭は猿で、胴はとら、尾は蛇という鶴たづになってしまったのである。それからというものは、誰もよせつけず小屋に住んでいたが、息子にあいたい一心から母親の鶴は大空にむかって大きな息を吐きつけると、空いちめん白い霧になった。霧で姿をみせないようにして、大空をとび、都にむかった。

頼政に会おうと思ったが、今では鶴の姿になっているので会うことができない。母は毎夜のように頼政の主人の屋敷の上に姿を現わし怪しい声で鳴くので、頼政の主人は、うなされてついに病気になってしまった。

「だれか退治をするものはいないか」とふれを出したので、大勢の家来が我も我もと弓を射たが誰の矢にもあたらない。母親は我が子の出世のために、頼政に射られてやろうと考えた。ある雨の降る晩に頼政が矢をつがえて待っていると、屋根の上に鶴が姿を現わした。ねらいさだめた頼政の矢はみごとに鶴の目と目の間にあたり、しとめることができた。

それからというものは、主人の病気もなおり、頼政はほうびに土佐の国をあわせてもらった。

頼政の館趾と、母を祀る菩提所、大寂寺は今の中津小学校にあったが、昭和二年の大火で大寂寺は焼け、学校のすぐ上に新しく建造されたが、そのときに頼政の位牌や、その他の遺品も焼失した。

大寂寺は治承四年、源三位頼政が母の冥福を祈るために創建した寺という。頼政は清盛の横暴を見て、以仁王を奉

じて兵をあげたが、平氏の軍の追撃をうけて防ぎきれず力つきて自刃した。

ところが種々の風説が伝えられ、王といっしよに吉野に逃れたとか、子の仲綱と奥州に走ったとも伝えられ、頼政の墓も、東西所々に散在している。この地方の伝えによると、家臣井野早太が主君頼政の位牌を久主に持ち帰り、大寂寺に安置したという。焼失した位牌の表には「大寂寺殿従三位土岐清源泉公大居士」とあり、裏に治承四年四月五日とあったという。寺の西方に頼政の墓所があり、ここを御所と称している。大正八年一月に中津村在郷軍人会は、武士道を鼓吹するために、大寂寺の表庭に「土岐源三位頼政公之碑」と題する記念碑を建設した。

頼政の母の住居跡を長者屋敷と伝えられている。二箇の木地部落の大野正美所有の松林の中にあつて、現在井戸わくの石が残っているに過ぎない。もう一ヶ所は、長崎部落の養鱒場前であるが、これも井戸のみ残っている。

頼政の母は、水垢離みずごりをとるようになってから木地に小屋を建てて、下にはおりなかつたという。

## 二、弾正ヶ嶽

稲村の先場部落に河野弾正の前膳まげのお堂があり、そこから一〇〇坪のぼると弾正の母の塚が道端の畑の中にある。また、そこから急坂を一キほど上ると神宮寺の跡に祠堂しじやうがある。お堂の中には、高さ四〇坪ほどの不動明王が一体安置されている。以前は弓矢やその他武器が多数あつたが、いつの間になくなってしまったという。

古くから旧の二月八日と八月八日の二回に祭事がおこなわれている。そのすぐ横に岩のほら穴がみられ、弾正の住い跡とよく間違えられるのであるが、この地点から二〇〇坪ほど道をのぼると弾正ヶ嶽がある。そこが弾正が住んでいたという鐘乳洞である。

南北朝のころ河野弾正・土居備中守らは宮方に属して戦い桑村郡千町ヶ原の合戦に敗れ、この地に身を隠し生涯をおくつたのだという。

## 三、鉢窪の大蛇退治

むかし、山中の池に大蛇が住み、旅人や村人をおそうの

で大へん恐れられていた。その頃、山ひとつへだてた稲村の山中に住む南朝の落武者河野弾正や土居備中守らの勇士がこれ聞き、退治してやろうということになった。

九州から七名の山伏を迎えてきて、池のまわりで、大蛇を出してほしいと神に祈ると、まもなく波が大きくゆれはじめ、体長五〇呎もある大蛇が現われた。待ちうけていた弾正らは、いっせいに弓矢を放ち、刀でぎりつけた。いきおいあまつて弾正の兜の鉢がちぎれて池にとんだ。ながい奮戦の後、とうとう大蛇をたおすことができた。

村人は、大蛇を退治してくれた勇士をいつまでもたたえ、恩に報いるために今の九社神社に兜を宝物として祭り、毎年春と秋の彼岸の中日にお祈りをするようになった。この大蛇退治で、勇士がはなった矢がひと山越えて下の大河に落ちたというので、そこを「矢ぶち」といい、兜の鉢が落ちたところを「鉢窪」と呼び、この地方を「鉢」と名づけられたという。

土居備中守はその後、鉢に住み村人のためにつくしたので、村人からは氏康様とあがめられてきた。備中守の墓は、上場部落の民家の庭先にある。正面には「備中守義

満」、側面には「庚辰二月八日」とある。明治一三年二月八日に再建されたものであろう。

また、鉢窪は、上場部落から西の方向、小谷をひとつ越えた尾根にあるが、現在はから池である。その沼の中ほどに石を積んだ小さい塚らしきものがみられるが、これが大蛇の墓だという。また「矢ぶち」は落出橋から四〇〇呎ほど上にあるふちをいう。

#### 四、姥捨て山

美川村黒藤川長崎のヨラキレから約二時間半、山道を登りつめたところの高知県境に「姥捨て山」と称するところがある。全国各地に姥捨て山の伝説があるが、ここでも老人を山奥に置き去りにする習慣があったと伝えられている。不治の病におかされたり、働けない老人を経済的理由で辺地に置き去りにし、凍死や餓死させたのである。

むかしの百姓の生活はごく貧しくその日その日の生活がでかかねた。老人も割り切っていて自ら命を断ったり、家を出して物もらいの生活をするものもあり、家族に連れられて、山奥に置き去られることを宿命としてあきらめてい

たようである。高知県吾川郡あたりからも、ここに老人を捨てに来たとも言われ、また別の伝えではここは大罪人の斬首の地であったとも言われている。

真偽のほどは、はかりがたいが辺境の不便な地に生活する人びとのくらしと、当時の世相をうかがうには十分である。約二〇〇年ぐらいい前のことであろうか。

ここに鳥居やホコラ、塚が立てられているが、こうした不遇な老人を供養するために建てられたものであろう。

## 五、盗人岩

二笠山の土佐街道を猿楽から西方へ七〇〇疋ほど尾根づたいに行くと、うば窟というところがある。ここはふるくから雨乞いの場所であられ、山の神様が祭られている。そのお堂から六〇疋ほど手前のところに高さ二疋、周囲一二疋余りの、餅の形をした岩がある。この岩を「盗人岩」という。

むかし、七人の悪党が金を盗み、ここまできた。もう追手もこないし、つかれたので、ひと休みをしようと思をおろした。

盗みを知った石鎚の神様は大へんいかり、石鎚山頂の巨石を投げつけて、七人を下敷にしてしまった。岩の上にお金をのせて、岩を三回まわると、置いたはずのお金はなくなってしまふといわれている。

この地点から石鎚山は一望のうちにあり、盗岩の石は石鎚山の岩と同種のものであるという。(西田金次談)

## 六、土佐の志士たち

高知県高岡郡新居村の中島与市郎(当時二三歳)、いとこの高岡郡塚地村の中島信行(当時一九歳)、新居村細木核太郎(当時二七歳)の三名は、勤王の志士坂本竜馬をしたい、京に上ろうとして吾川郡名野川渡の百性西森梅造の道案内で関所を破った。大明河峠を経て、水の峠を越え、二笠山で大雪のため歩行困難で日が暮れ、二笠山を下り、一夜を二笠部落の田辺オトワの家で明かした。翌日与市郎は足腰の痛みから先に進めず二笠山で信行等と別れ、もってきた道をひき返し、翌日水の峠の大師堂の中で射ち殺された。水の峠には史跡の標識があり、隅田幸平の手による石地蔵が安置されている。

道案内をとめた西森梅造は二笹山で別れて中津明神山を下り、郷土には帰らず、中津の久主で生涯をおくり大正の中頃に死去した。

## 第九章 村につくした人々

### 一、梅木二三（一八二八～一八八二）

文政一一年に黒藤川村の庄屋家に生れた。父を梅木左衛門という。藩政時代の庄屋は明治四年で廃止になったから、彼は最後の庄屋となった。

黒藤川は急斜面を利用しての畑作が主であった。裏山が低いために水利が悪く、飲料水にさへ事かくほどであったから水田耕作などは全く出来ない貧しさであった。彼は前から水田を開いて、水田をおこすことを計画した。そして数年がかりで四ヶ余の水路を完成させた。当時の土木技術では、これは非常な難事業であった。水盛の測量とか、夜間に光を利用しての提灯測量とか種々の工夫をしている。石を割るにもダイナマイトはなかった。

この工事の完成によって各所に水田を開くことが出来て、村民はようやく米を作ることが出来た。彼はまた前川橋の架橋を思い立った。これまでは岩から岩へ丸太を二つ割りにしたぐけのもので大水のたびに流され、また村人が落ちて死ぬこともあった。何としても恒久の橋にせねばならぬ、と考えて兩岸に「見通しの地藏尊」をまつり、よい橋材を求めて仕事に取りかゝったが、不幸にして工事なかに病に斃れた。虫が耳に入って、これが原因で高熱を発したものと伝える。また私財を投じて仕事を興したので一文なしになったといわれる。橋は村人が遺志をついで完成させたが、黒藤川の彼の墓には石碑もなく朽ちた墓標が淋しく立っている。明治五年に始まる戸長役場の七鳥・仕出・東川の三村の二代目戸長に梅木二三がある。恐らくこの黒藤川庄屋と同一人物と思われる。伝記の詳細を知り得ないのが残念である。

### 二、古田利作（一八六五～一九三八）

中津村四・五・六・七代村長。慶応元年九月二日、黒藤川の古田光太郎の二男に生れた。彼は温厚な円満な人柄



で、村人の信頼も厚く明治三〇年三月から四三年五月まで一三年余を勤めた。当時は政友会と憲政会の反目対立がはげしくて、一つの失政でもあると反対派は論難攻撃したし、また中津は財政的には小さな村であったため、かなりの資産家でないといふと村長にはなれなかった。

彼は別に失政というものもなく、よく長年を勤めたが、その間に村の負債はいつともなくふえて相当額に達していた。そのためこの村債を私財によって償い、清算して松山に移り住んだ。

一時は古三津役場に書記として勤めたが、やがて上一万で代書業をはじめた。こうして昭和一三年七月七日に七三歳で死去した。

### 三、亀井 要（一八八二～一九三八）

八・九・一〇代村長。明治一五年三月一日に現柳谷村中津の亀井平太郎の二男に生れた。日露戦争に従軍し、工兵伍長、勲八等に叙せられている。

明治四二年に書記として役場入りし、四三年一月に収入役、同年一月に村長となり以来大正一一年末まで三期一

二年間勤務した。その間、農林・畜産の振興に努めたが、特筆すべきは村有財産としての造林事業である。

中津村の一・二の部落（沢渡一、黒藤川六、久主五）にそれぞれ一町歩（約一畝）の植林を割りつけ、費用は村費で補助した。この村有林は太平洋戦争中には軍用材一五万才の割当てを賄うことが出来たし、中津明神山・長崎皿ヶ峰などの村有林は戦後の学校建築や公共土木建築事業の資金源となって村民を利している。

彼は村長のほか郡農会長、畜産組合長、信用組合長などをとめて功績が多い。昭和一三年七月に五八歳で死去した。

### 四、宅宮長三郎（一八八六～一九五七）

一一代村長、明治一九年二月一〇日、黒藤川の宅宮寅吉の長男に生れた。青年時代に弁護士を志して広島法律学校に学んだ。

一九歳のとき役場書記となり、明治四二年収入役、大正七年助役、一二年に村長になった。彼の村長の期間は二年そこそこであったが、その間に彼は黒藤川の人々の古くか

らの夢であった「中津大橋」を架橋している。

これまで黒藤川の人達は渡し舟を利用して来た。渡し舟は不便である。面河川はしばしば大洪水となり対岸との交通は途絶する。急病人が出たり急用の出来た時はどうする事も出来ない。村人は古くからこの地に生れた宿命と観じていた。彼は何としても橋をかけねばならぬと考え、設計・資金計画を立て、村民の賛同を得ることに努力した。當時としては途方もない大事業だった。

大正一二年に着工し、一四年一月一日に完成したこの橋はピアーの高い鉄筋コンクリート造り、中央部は朱塗りの鉄骨アーチという県内でも珍らしい長大な美しいものでこれによって中津村が受けた恩恵ははかり知れぬ大きなものであった。

彼はその後、昭和一四年から二〇年まで六年余、収入役にかえり咲いたり、養蚕実行組合長として長期にわたり養蚕振興につとめ、また信用組合理事・会長などの役職について経済発展に多くの功績を残し、昭和三二年八月二二日、七二歳で死去した。六男寛は道後中学校を最後に教育界を去り、松宮産業社長として活躍している。

## 五、久保雅晴（二八八八）

一二・一三・一四・一五・一六・一七代村長。明治二一年五月一日、黒藤川字二箇に生まれた。明治三九年三月に師範学校を卒業し、久万小学校に赴任した。わずか一年で校長に抜擢され、川瀬・中津・小田・父二峰を経て再び中津へと校長を歴任、大正一四年三月まで教壇生活一九年間におよんだ。退職後、嘱望されて大正一四年一二月、三九歳の若さで村長に選ばれ、以後二〇年にわたって村政を担当した。

彼の事業として特筆すべきものは中津村負債整理組合である。当時、中津村民は柳谷村の富豪から多くの借金をしており村内の田畑・山林でその抵当に入っているものが多かった。この負債の解決なくして村の立て直おしはないと考えて組合を作ったのである。負債整理は年次計画で長年月を要したが、遂に負債を解決することが出来た。また二箇道路の開通に努力し、辺地開発につとめるなど地味であるが着々と村政の実績をあげた。

温厚・公平・誠実な人柄で、かほどの長年月にわたって

村政を担当して村民の信望を集めた村長は他に類例がない。上浮穴郡教育界の長老、上浮穴郡町村会の元老で多くの功績を残し、現在松山で老後の生活を楽しんでいる。

#### 六、伊藤幾太郎（一八八九～一九七三）

一八代村長、明治二二年一月二四日、現温泉郡重信町志津川に伊藤嘉吉の長男として生れたが、どのような理由があったのか四歳のとき一家は黒藤川に移り住んだ。やがてまた七歳のとき西之谷へ移った。

当時の食事はとうもろこしが七、八分はといった粗食であった。もっともこれは彼の家に限ったことではなく久万山はおしなべてそうであった。一七歳のとき教育者を志して久万町の準教員養成所に入り、二年を過して久主尋常小学校の準教員となった。家計不如意の中から出してもらった学資を安い給料から全額両親に返すという細かい心遣いをしていいる。また教員としての学力不足を感じ、改めて師範学校に入学して卒業、改めて教壇に立った。こうして一三年間、中津・柳谷・仕七川を歴任し、校長として精励した。

父の死後は家庭事情から教員生活が続けられず家業に専念した。昭和七年に人柄を見込まれて収入役となり、二期つとめて助役、やがて終戦直後の混乱の中で村長として村政を見たが僅か一年余で退いた。晩年には教育委員長もつとめた。終世、孔子のいう「修身齊家治國平天下」を信条として身を処し、昭和四八年二月、八四歳で死去した。

#### 七、政木茂十郎（一八九八～）

一九・二〇代村長、明治三一年四月一五日に久主の井野田忠次の二男に生れ、のち政木家に入った。四三年落出高等小学校を卒業、入営するまで家業の農事に励んだ。

大正七年末に兵役を終った時、酒類の製造販売をはじめ、同時に推されて中津村信用組合長となり、以来昭和六年まで一三年余を勤め上げた。引つゞき家業の傍ら村議会議員・消防組頭・警防団長、昭和一四年に役場入りして助役を二期つとめ、また中津村農業会長となっている。

昭和二二年四月、伊藤村長辞職のあとを承けて村長となり、以来二期、合併による中津村閉村までを勤めた。ようやく終戦後の虚脱状態から抜け出したとはいえ、学制の改

革から進駐軍命令の処理、社会機構の改革に即応しつゝ財政運営を行くには、平時の村長のうかゞい知らぬ苦勞が伴なつたし、また中津村を二分して美川・柳谷となる町村合併期には最高責任者として焦心勞身の苦しみを嘗めた。生来温和で誠実、公平無私の彼は世論をよく聞き、論すべきは論して大勢に随わせた。町村合併後は居住地の関

係から柳谷村に属し、柳谷村助役一年ののち三一年六月から柳谷村村長を二期八年間勤め、柳谷村森林組合長理事・上浮穴郡老人クラブ連合会長・柳谷村老友会連合会長などをつとめている。天性の温かい人間味と誠実さは周囲の人々の大きな信頼を得ているのである。

歴代村長・助役・収入役・収入役代理者・村議会議員

村 長

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名	代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名		
初	一、一五二五、	三、二八二、	二	辭職	岡田 為政	一	一、一二、	四、一二一四、	一、一六	一、九	辭職	宅宮長三郎	
二	二、一五、	四、一九二五、	一、二五〇、	〇、八	龜井 玆武	二	二、二四、	一、二、二三四、	一、二、二三四、	〇	滿期	久保 雅晴	
三	二、二七三〇、	二、二六四、	〇	〇	林 利與	三	四、一二、	二、二四八、	一、二、二三四、	〇	〇	久保 雅晴	
四	三、三〇三四、	三、二九四、	〇	〇	古田 利作	四	八、一二、	二、二四〇、	九、七	一、九	辭職	久保 雅晴	
五	三、三〇三八、	三、二九四、	〇	〇	古田 利作	五	一〇、九	一、九四、	九、四	〇	滿期	久保 雅晴	
六	三、三〇四二、	三、二九四、	〇	〇	古田 利作	六	二〇、二八、	九、一九四、	二、四	〇	〇	〇	久保 雅晴
七	三、三〇四三、	五	〇	〇	古田 利作	七	二〇、二〇、	八、三一	二、二	〇	〇	辭職	久保 雅晴
八	一、一〇	三、一一	九	〇	龜井 要	八	二、二二、	一、二	〇	〇	〇	〇	伊藤幾太郎
九	一、二二	二、一一	四	〇	龜井 要	九	二、二二、	四、二	〇	〇	〇	〇	政木茂十郎
一〇	一、二二	二、一一	四	〇	龜井 要	一〇	二、二二、	四、二	〇	〇	〇	〇	政木茂十郎

助 役

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏 名
初二、三、明	一、一五二五	一二、二五二	一、二	辭職	龜井 孫次
二二、六	一、九三〇	一、八	四、〇	滿期	森本 兵次
三三、〇	一、九三四	一、八	四、〇	〃	森本 兵次
四三、四	三、二九三八	三、二八	四、〇	〃	井野田忠次
五三、八	三、二九三九	七	一、〇	辭職	井野田忠次
六三、九	八、二四二	一	二、一	〃	西野 和藏
七四、二	二、一六二	二、一五	四、〇	滿期	山内 一吉
八二、一	一、六一	一、一五	四、〇	〃	篠崎 佐吉
九七、六	一〇二一	六、九	四、〇	〃	宅宮長三郎
一〇二、七	一、二二	四、一二	〇、九	辭職	宅宮長三郎
代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏 名
二二、二	七、九	二、七	二、七	滿期	西野 雅一
二二、三	二、二七	七、二	二、七	〃	井野田美春
二二、四	二、二七	七、二	二、七	〃	堀尾 好光
二二、五	二、二七	七、二	二、七	〃	政木茂十郎
二二、六	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、七	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、八	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、九	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、〇	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、一	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、二	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、三	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、四	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、五	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、六	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、七	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、八	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二二、九	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、〇	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、一	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、二	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、三	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、四	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、五	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、六	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、七	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、八	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二三、九	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、〇	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、一	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、二	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、三	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、四	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、五	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、六	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、七	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、八	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二四、九	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎
二五、〇	二、二七	七、二	二、七	〃	伊藤幾太郎

収 入 役

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏 名
初二、三、明	一、二五	二五、三	二、二八	辭職	岡田 為政
二二、五	五、七二五	一二、二五	〇、七	〃	龜井 茲武
三二、六	三、一三〇	二、二八	四、〇	滿期	天野藤次郎
四三、〇	四、六三四	四、五	四、〇	〃	天野藤次郎
五三、四	四、六三七	一、二	三、八	辭職	森本 兵次
六三、七	一、二八四	一、二	四、〇	滿期	篠崎 佐吉
代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏 名
七四、二	一、六四三	一、二	六四三	辭職	宅宮長三郎
八四、三	一、八四三	一、五	〇、一	〃	龜井 要
九四、三	一、一四	三、一	一、三	滿期	龜山 賢盛
一〇四、三	一、二	四、〇	四、〇	辭職	田中 友一
一一四、三	一、二	五、〇	四、〇	〃	佐賀 龜吉
一二四、三	一、二	六、〇	四、〇	〃	山内 茂
一三四、三	一、二	七、〇	四、〇	〃	山内 茂
一四四、三	一、二	八、〇	四、〇	〃	山内 茂
一五四、三	一、二	九、〇	四、〇	〃	山内 茂
一六四、三	一、二	一〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
一七四、三	一、二	一一、〇	四、〇	〃	山内 茂
一八四、三	一、二	一二、〇	四、〇	〃	山内 茂
一九四、三	一、二	一三、〇	四、〇	〃	山内 茂
二〇四、三	一、二	一四、〇	四、〇	〃	山内 茂
二一四、三	一、二	一五、〇	四、〇	〃	山内 茂
二二四、三	一、二	一六、〇	四、〇	〃	山内 茂
二三四、三	一、二	一七、〇	四、〇	〃	山内 茂
二四四、三	一、二	一八、〇	四、〇	〃	山内 茂
二五四、三	一、二	一九、〇	四、〇	〃	山内 茂
二六四、三	一、二	二〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
二七四、三	一、二	二一、〇	四、〇	〃	山内 茂
二八四、三	一、二	二二、〇	四、〇	〃	山内 茂
二九四、三	一、二	二三、〇	四、〇	〃	山内 茂
三〇四、三	一、二	二四、〇	四、〇	〃	山内 茂
三一四、三	一、二	二五、〇	四、〇	〃	山内 茂
三二四、三	一、二	二六、〇	四、〇	〃	山内 茂
三三四、三	一、二	二七、〇	四、〇	〃	山内 茂
三四四、三	一、二	二八、〇	四、〇	〃	山内 茂
三五四、三	一、二	二九、〇	四、〇	〃	山内 茂
三六四、三	一、二	三〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
三七四、三	一、二	三一、〇	四、〇	〃	山内 茂
三八四、三	一、二	三二、〇	四、〇	〃	山内 茂
三九四、三	一、二	三三、〇	四、〇	〃	山内 茂
四〇四、三	一、二	三四、〇	四、〇	〃	山内 茂
四一四、三	一、二	三五、〇	四、〇	〃	山内 茂
四二四、三	一、二	三六、〇	四、〇	〃	山内 茂
四三四、三	一、二	三七、〇	四、〇	〃	山内 茂
四四四、三	一、二	三八、〇	四、〇	〃	山内 茂
四五四、三	一、二	三九、〇	四、〇	〃	山内 茂
四六四、三	一、二	四〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
四七四、三	一、二	四一、〇	四、〇	〃	山内 茂
四八四、三	一、二	四二、〇	四、〇	〃	山内 茂
四九四、三	一、二	四三、〇	四、〇	〃	山内 茂
五〇四、三	一、二	四四、〇	四、〇	〃	山内 茂
五一四、三	一、二	四五、〇	四、〇	〃	山内 茂
五二四、三	一、二	四六、〇	四、〇	〃	山内 茂
五三四、三	一、二	四七、〇	四、〇	〃	山内 茂
五四四、三	一、二	四八、〇	四、〇	〃	山内 茂
五六四、三	一、二	四九、〇	四、〇	〃	山内 茂
五七四、三	一、二	五〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
五八四、三	一、二	五一、〇	四、〇	〃	山内 茂
五九四、三	一、二	五二、〇	四、〇	〃	山内 茂
六〇四、三	一、二	五三、〇	四、〇	〃	山内 茂
六一四、三	一、二	五四、〇	四、〇	〃	山内 茂
六二四、三	一、二	五五、〇	四、〇	〃	山内 茂
六三四、三	一、二	五六、〇	四、〇	〃	山内 茂
六四四、三	一、二	五七、〇	四、〇	〃	山内 茂
六五四、三	一、二	五八、〇	四、〇	〃	山内 茂
六六四、三	一、二	五九、〇	四、〇	〃	山内 茂
六七四、三	一、二	六〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
六八四、三	一、二	六一、〇	四、〇	〃	山内 茂
六九四、三	一、二	六二、〇	四、〇	〃	山内 茂
七〇四、三	一、二	六三、〇	四、〇	〃	山内 茂
七一四、三	一、二	六四、〇	四、〇	〃	山内 茂
七二四、三	一、二	六五、〇	四、〇	〃	山内 茂
七三四、三	一、二	六六、〇	四、〇	〃	山内 茂
七四四、三	一、二	六七、〇	四、〇	〃	山内 茂
七五四、三	一、二	六八、〇	四、〇	〃	山内 茂
七六四、三	一、二	六九、〇	四、〇	〃	山内 茂
七七四、三	一、二	七〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
七八四、三	一、二	七一、〇	四、〇	〃	山内 茂
七九四、三	一、二	七二、〇	四、〇	〃	山内 茂
八〇四、三	一、二	七三、〇	四、〇	〃	山内 茂
八一四、三	一、二	七四、〇	四、〇	〃	山内 茂
八二四、三	一、二	七五、〇	四、〇	〃	山内 茂
八三四、三	一、二	七六、〇	四、〇	〃	山内 茂
八四四、三	一、二	七七、〇	四、〇	〃	山内 茂
八五四、三	一、二	七八、〇	四、〇	〃	山内 茂
八六四、三	一、二	七九、〇	四、〇	〃	山内 茂
八七四、三	一、二	八〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
八八四、三	一、二	八一、〇	四、〇	〃	山内 茂
八九四、三	一、二	八二、〇	四、〇	〃	山内 茂
九〇四、三	一、二	八三、〇	四、〇	〃	山内 茂
九一四、三	一、二	八四、〇	四、〇	〃	山内 茂
九二四、三	一、二	八五、〇	四、〇	〃	山内 茂
九三四、三	一、二	八六、〇	四、〇	〃	山内 茂
九四四、三	一、二	八七、〇	四、〇	〃	山内 茂
九五四、三	一、二	八八、〇	四、〇	〃	山内 茂
九六四、三	一、二	八九、〇	四、〇	〃	山内 茂
九七四、三	一、二	九〇、〇	四、〇	〃	山内 茂
九八四、三	一、二	九一、〇	四、〇	〃	山内 茂
九九四、三	一、二	九二、〇	四、〇	〃	山内 茂
一〇〇四、三	一、二	九三、〇	四、〇	〃	山内 茂

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名	代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名
一三	九、一〇、二一	昭一三、一〇、一〇	四、〇	満期	中平 栄	一八	二、四、九	六、一八、九	四、〇	満期	宅宮長三郎
一四	一三、一〇、一三	三、一〇、二二	四、〇	〃	中平 栄	一九	二、八、九	六、二〇、一三、二〇	二、三	退職	宅宮長三郎
一五	一三、一〇、一三	七、一〇、二二	四、〇	〃	中平 栄	二〇	二、〇、一三、二二	二、四、一三、二〇	四、〇	満期	田野 正哉
一六	一〇、二〇、二〇	一、一〇、一九	〇	〃	伊藤幾太郎	二二	二、四、一三、二二	三、三〇、三、三〇	五、三	退職	田野 正哉
一七	一〇、二〇、二〇	二、一四、九	二	退職	伊藤幾太郎						

収入役代理者

明	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名
大	四、一、二〇	大 四、九、五	三、一〇	退職	土居 利朗	一三、一、四	二、一、三	九、九	退職	渡部 一加
大	四、九、六	七、六、九	二、九	〃	宅宮長三郎					

村議会議員

明	選出年月日	退職年月日	摘要	氏名	選出年月日	退職年月日	摘要	氏名
一三、一、四	不	明	不明	古田光太郎	一三、一、四	二六、一	不明	森本 兵次
一三、一、五	〃	〃	〃	亀井 平八	〃	二六、一	不明	天野藤次郎
一三、一、五	〃	〃	〃	高石徳次郎	〃	二六、一	不明	西野 和蔵
一三、一、五	〃	〃	〃	山本 常蔵	〃	二六、一	不明	井野柳太郎
一三、一、五	〃	〃	〃	高石久次郎	〃	二六、一	不明	宅宮 寅吉
一三、一、五	〃	〃	〃	篠崎嘉藤太	〃	二六、一	不明	坂田半次郎

三、五、一、四	"	"	"	"	"	"	"	三、二、一、四	"	"	"	"	"	"	二、八、一、二、二、九	"	"	二、六、九、四	二、六、一、一、三	二、六、一、一、三	二、六、一、一、四	二、六、一、一、三	選出年月日
四、一、三	"	"	三、八、一、四	三、五、一、三	"	"	三、八、一、三	"	"	"	"	"	"	"	三、五、一、三	三、二、一、三	"	二、八、一、二	"	"	三、三、一、三	不、明	退職年月日
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	摘
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	要
一分片庄藏	井野柳太郎	櫻木新藏	小西岩松	的場岩吉	西野和藏	浅倉岩吉	天野勘五郎	佐賀長九郎	和泉榮藏	山本牧藏	片岡辰藏	篠崎嘉藤太	天野留吉	片岡類太郎	鈴木友市	佐賀長九郎	西野和藏	一分片庄藏	天野勘五郎	越知秋造	中塚忠六	中田岩太郎	氏名
"	"	四、四、一、五	"	"	四、四、一、四	"	四、四、一、五	四、一、一、五	"	四、一、一、四	"	"	三、八、一、五	"	"	三、八、一、四	"	"	"	三、五、一、五	"	三、五、一、四	選出年月日
"	"	"	"	三、一、三	四、四、一、一、八	"	"	"	"	大、三、一、三	"	"	四、四、一、四	四、四、一、三	四、三、一、一、〇、三	四、四、一、一、三	"	"	"	四、一、一、四	四、一、一、三	四、一、一、三	退職年月日
"	"	"	"	滿	辭	"	"	"	"	"	"	"	"	滿	辭	"	"	"	"	"	"	"	摘
"	"	"	"	期	職	"	"	"	"	"	"	"	"	期	職	"	"	"	"	"	"	"	要
矢野安藏	高石求吉	山地伊藏	山徳新太郎	片岡留吉	篠崎友太郎	天野福太郎	竹下源十郎	土居岡次郎	石村重吉	的場岩吉	佐賀亀吉	相原長次郎	浅倉音市	西野和藏	小西岩松	龜井安太郎	阪本友太郎	山本牧藏	天野福太郎	土居岡次郎	龜井幸作	竹下源十郎	氏名

										七、 一、 四											三、 一、 四	選出年月日	
										一、 一、 三											七、 一、 三	退職年月日	
																					滿	摘	
																						期	要
的場 岩吉	平柳 康延	阪本友太郎	竹中 筆吉	中越 勇馬	和泉 增衛	天野 徳松	坂田 敬次	矢野 安蔵	大西 傳吾	矢野 久吉	小西菊太郎	小坂福太郎	岡崎藤次郎	大西 傳吾	高石久三郎	山内一吉	阪本友太郎	中越 勇馬	矢野 熊蔵	林 源吾	竹中 筆吉	向井 米蔵	氏名
			一五、 一、 四				一四、 三		一三、 一、 三〇												一七、 一、 四	選出年月日	
			昭 五、 一、 三						一五、 一、 三	一二、 一、 四	一五、 一、 三	一四、 一、 五	一四、 一、 三		一五、 一、 三〇	一二、 一、 三			一五、 一、 三	一四、 一、 三	一三、 一〇、 三	一一、 一、 三	退職年月日
									滿	辭	滿	死	辭		滿	辭			滿	辭	死	滿	摘
									期	職	期	亡	職		期	職			期	職	亡	期	要
龜井 要	井野田美春	升田金十郎	佐賀政太郎	中谷乙松	向井要吉	矢野森十郎	龜井要	高石久三郎	井野田美春	天野徳松	石割福知	久保房吉	大西傳吾	篠崎佐吉	小西菊太郎	龜井數次	龜山賢盛	堀尾好光	栄代一保	矢野善蔵	中越勇馬	西森喜市	氏名



九、 一、 四	五、 一、 四	一五、 一、 四	選出年月日
一三、 一〇、 一、 三	九、 八、 一、 三	五、 一、 三	退職年月日
満 死 期 亡	満 辞 期 職	満 期	摘要
政木茂十郎 長谷 義元 佐賀 海留 篠崎 佐吉 中谷 乙松 小林和十郎 近藤繁太郎 田野音之進 堀尾 好光 山内 清光 相原勝太郎 龜井 要	石村兼太郎 西森 喜市 佐賀政太郎 和泉 增衛 中谷 乙松 小林和十郎 天野 龜松 谷 紋次郎 金浦愛次郎 高木 利作	矢野 安藏 高木 利作	氏名
一七、 五、 二二	一〇、 一、 四	九、 一、 四	選出年月日
二三、 四、 二九	一七、 五、 二〇	一三、 一、 三	退職年月日
満 辞 期 職	満 期	満 期	摘要
西本 直行 天野 時丸 古田 儀照 山内 熊平 中居 福一 上場 萬市 上岡 永伯 西森 清光 山内 清光 鈴木 雅晴 久保 雅晴 西本 直行 相原勝太郎 鈴木 茂 和泉 增衛 山内 茂 山崎長太郎 田辺 正雄 森 倉之進 田野音之進 堀尾 好光 山内 清光 龜井 要	西本 直行 相原勝太郎 鈴木 茂 和泉 增衛 山内 茂 山崎長太郎 田辺 正雄 森 倉之進 田野音之進 堀尾 好光 山内 清光 龜井 要	龜井 要 山内 清光 堀尾 好光 田野音之進 森 倉之進 田辺 正雄 山崎長太郎 山内 茂 和泉 增衛 鈴木 茂 相原勝太郎 西本 直行 久保 雅晴 鈴木 雅晴 山内 清光 西森 永伯 上岡 萬市 上場 福一 中居 熊平 山内 熊平 古田 儀照 天野 時丸 西本 直行	氏名

一七、五、二二	選出年月日	二六、四、三〇	退職年月日	滿期	氏名
森倉之進		谷稔			
田中清藏		岡田勝			
石原正則		西野雅一			
松本吉市		相原勝太郎			
古田儀照		鈴木茂			
井野田美春		片岡源市			
升田重広		土居敏雄			
古田儀照		森倉之進			
大上春義		小林一			
石村重		森本賀名米			
久保金松		阪本秀吉			
矢野久吉					
二六、四、三〇	選出年月日	三〇、三、三〇	退職年月日	滿期	氏名
松本吉市		相原勝太郎			
佐賀養		西野雅一			
石村重		町村合併に依る自然退職			
天野重見		西森則知			
篠崎利光		松本吉市			
相原正明		小林一			
升田重広		山内寅吉			
古田儀照		谷昌美			
森倉之進		堀尾好光			
山本眞淵		西野雅一			
田村繁行					